

傾城阿波の鳴門

第一

唐の七賢、嵇廣、既籍、元咸、尙秀、王珪、山濤、列侖、思ひくに出立つて、離山の篋、長林竹に會合あり、種々の遊宴たのしけれ。嵇廣各に打ちむかひ、蓋誠や琴詩酒の三ツの友、あら面白の氣色やな」竹の林に猛虎住み、池中は龍の住家といへども、此七賢は事かはり、竹中に酒を愛して蛇呑といふ、異名も殊にこつぶの盃、酌かはしたる不老不死、さいつ、押へつ盃の、間の手元を見ての間、廻る酒宴に、唐歌の、ちやんほんりんとん、すべろんちや、ぶくすい、べいく、びんくろじつく、はいくすべい、ろんびんく、ゑいくさ、諷ふ唱歌のあやもなき。「サ是からは拳酒」と、又つぎかけて、香めや諷へや絲竹の、縁に雀の一踊、拳を拍子の踊ぶり、ムテ、チエイ、ロマ、ヤットセイヨイく、ウ、キウ、ムテ、ヤットセイヨイく、ゴウ、チエイ、ハマ、ヤットセイヨイく、こんな踊が日本にあるか、有るは既籍が懐中と、一卷を取出せば、六人立寄りさらくさつと押抜き、立別れ讀む有様は、屏風襖の繪そら言、虚八百の

文言もんごんと笑わらふに、太夫たふ引舟ひねふね禿かぶ ばらくくくと走はしり寄り、太夫たふ稽しうくわう廣くわうす、エ、憎にくと、捻つめり擲たかれあ
 いたしこ、「是こゝは七賢しちけんけんによもない、赦ゆるせく」と迺なほ廻まわれば、亭主ていしゆ九八くはち押おしへだて、九八くはちア、申
 し高たか雄を様さま、お恨うらみは御ご尤よし、是こゝは一番いちばん我等われらが貰もらひ」と、いへども太夫たふは、太夫たふ「イエく、此間こゝから
 心のたけを書かいた文ふみ、一ツいつに繼ついで虚うそ八百やっぱくのと今のしだら、わたしや腹はらが立たつわいなア」九八くはちチ
 ヲ太夫たふすのが皆みな道理だうり、私わたしとてもナウ三彌さんみ「三彌さんみ」アイ私わたしも俱ともに」と立たちかよれば、稽しうくわう廣くわうア、コリヤ
 待まちてく、わしは眞實しんじつに思おもへども、此末社まうしやの賢人けんじん共ともが、おだてかけての口拍子くちばやし、祭まつりの俄はが、下稽したげ
 古こ、もう七賢人しちけん取置といて、中直なかちほしに奥座敷おくざしきで酒さけにせう、堪忍かんにん仕しや」といふに太夫たふは嬉うれしさの、
 笑わら顔がほに取付とく牽頭持けんとうぢ、牽頭持けんとうぢサア御機嫌ごきげんが直ちつたぞ九八くはち様さま「九八くはちいかにもく、東助とうすけ、西助さいすけ、佐渡さど
 七しち、辨助べんすけ、大助だいすけ、合點がてんか」牽頭持けんとうぢ合點がてんぢやく。旦那太夫だんなたふすお先まへへく」手てを引合ひひて先に立たつ。
 跡あとに皆みな々々聲揃こゑぞろへ、「七賢人しちけんぢや、西樂人さいがくじんぢや、俄はがぢやくく」と騒さわぎ立たててぞ奥座敷おくざしき、廓賑くわくわじは
 ふ大紋だいもん日ひ、機嫌きげんも吉原巴屋よしはらどちやに、居續ゐつづ遊あそびの大おほ名な容よう、玉木衛門たまきゑもん之助のすけが大騒おほさわぎ、美麗びれい輝かがやく燭臺しよくたいの、火
 影かげまばゆき有あ様さまは喜見城きけんじやうともいひつべし。大名風だいみんふうも打碎うちくだけ、姿衛門すがたゑもんもしどけなく、太夫末社たふまうしやを
 引連ひきつれて皆みな々々座敷ざしきに入い來きり、衛門ゑもん「サアく、是こゝから酒さけにせう」ソレお銚子てしお盃お盃、中居なかゐの政まさが會釋さいやく
 こほしてつぎかくれば、衛門ゑもん「ナットこりや強つよい酌しやく、にくさも憎にくし、助すけけてくれ」ソレヤ大將だいじやう

の御無理が出た、したが憎けれど、助けて上げい」と、無息にすつと呑我慢、「テモけなやつ」と引受けて、衛門「サア太夫、中直りの盃」と、さらりと呑んで指す盃、高尾取上げ下戸の氣さ
んじ、ちよつと受け、太夫「中直りの盃は濟んだれど、堅けれどもお慮外ながら」と指しかよれ
ば次の間より、團八「しばらく、其間を仕らう」と、襖押し明けいか物作り一腰ほつ込み、
胸に一物邪面、のつさくと入れば、たいこ持もじ氣味悪く、座敷の興も覺めにけり。衛門
之助身繕ひ、衛門「ムンついに見馴ぬ男、太夫が間を好むは様子あらん、マア其方は何者なるぞ」
團八「アイ此野郎めは、蛇河の團八といふ者でゑんす」衛門「ムンシテ此座敷へは何用あつて踏込
んだ、サア仔細を語れ」と、氣色鋭く見えければ、團八は猶強付き、團八「イヤコレ、怖い
顔さんすないの、阿州の大名玉木衛門之助殿でも、此廓へ入込めば、わしらと同じ客、揚屋の
座敷酒間をする事は、成らぬ法でござんすかな」と、物工なる詞の端、衛門之助推量し、じつと
おさへる胸の中、こらへず中居が引取つて、仲馬「コレ申し、お近付でもないお方、頼みもせぬに
間せうとは、ヲ、すかん、お前はほんに梶原平次、間をせうとはそりや無理ぢや。横間から指
出ずと、だまつて去んで下ださんせ」團八「エ、あたやかましよう嘲るまい、そもじにや構はぬ、
今の跡をいうて聞かさう高がかうぢや。此高尾を見切めてから、我等首尺は愚、四五尺をまだ

其上、登詰めた梯子の曲が、呆れて居るぢやけれども、こなんが晝夜の揚計、おれが手に廻らぬ故、けふ此座敷へしかけたは、太夫を貰ひに來たのぢや、かう團八が云出すからは、金輪際貰ひぬく。衛門殿、下あれく貰うた」と、腕まくりする堅横縞、竝居る者もあぶくと、手に汗握るばかりなり。衛門之助詞を和らけ、「ハテ思ひ寄らぬ事を聞く、成程太夫に夫程執心ならば、其方に遣さうといひたいが、マアならぬ。身が寵愛の此女、殊に身受も今日相濟み、今晚身が屋敷へ連歸る、夫に何ぞや、下郎の分際で、身が座敷へ踏込む慮外者、生置かぬ奴なれども、遊興の妨にもなれば今は赦す。叶はぬ願ひ早歸れ」と、きつと答ふる鸚鵡返し。團八「イヤ歸るまい、是非太夫を貰はにやいなぬ」と、聞くより中居はむしやくしや腹、仲馬「コレ夫は餘り長であらう、あなたのお慈悲有難いと思つて、早ういなんせ。あたいやらしいあの顔わい」と、恥しめられても蛙の面。團八「さういへばもう腕づく、サア衛門、くれる氣か今一言いへ聞かう」と、場所のあしきを付込んで、喧嘩じかけの面魂。たいこの佐渡七押隔て、佐渡七「ア、申しくと、團八様、最前から旦那のおつしやる事を、打消しておつしやるは、きつい御無理、かう座敷がしらけては、私が商賣たいこ持も上つたり、御機嫌直して一つ上つて、お歸りなされて下さりませ」と、詫る程猶付上り、團八「そりや何ほざく、うぬらが知つた事でない、似合た様にすつ

込んでけつかれ」と、立蹴にかゝる足首捕へ、佐渡七「ハテ聞分のないお方、何ほたいこ持ぢやとて同じ人間、お前のお脚でけらうとは、そりや餘りお胴欲、足元のあかい内、此お脚の満足な中に、早うお歸りなされませ」と、足首しつかと痛むれば、顔を擧めて、團八「アイタ、、、こりや痛いがなく、おのりやコリヤ手向ひをひろぐな」佐渡七「イヤ手向ひぢやない、足向ひぢや」團八「アイタ、、、たいこ持に似合ぬ、こりや手ひどいめに合しをつた、モウ堪忍がならぬは」と、ずはと抜いて切懸ける、腕首掴んで捻上ける。佐渡七「最前から詞甘い中に歸れば、こんな痛いめに合さぬ、御名を出されぬ遊里のお慈悲、腰骨に覺えたか」と、蹴飛す早業向ふへ輕業、間拍子もよいたいこ持、頓作もよき男なり。團八「漸起上り、腰をかよへて、團八」アイタ、、、こりや又ふくりんかけたな、云分の有るやつなれど、了簡して去んでこますは。おのれ腰骨に、よう覺えたぞ、必ず覺えてけつかれ」と、ちんがく、達者な物は口目玉、痛みくもにらみ付け、足を引きすり歸りける。衛門「ヲ、佐渡七出かしたく。たいこ持に似合ぬ働き、そちは見上げた者ぢやなア」佐渡七「ハイいやもう二才の時から、ほど轉業が過ぎての此身分、今のお役に立つと申すも、藝は身を助くる程な不仕合と、申す様なものでござりまする」衛門「いかにもく。コリヤ當座の褒美」と山吹色を投出す。「エ、有難し」と戴けば、衛門「エ、埒もない奴がうせを

つて、興きようがさめた、氣をかへて離座敷はなれざしきで呑直さう」九く「そりやこそ旦那の御出ぢや、中居衆なかみしほ頼むぞ」ヒンヨイく、亭主ていしゆがしやべるは、ヒンヨイく、打連れてこそ入りにけり。既に其日すでも黄昏たそがれに、人顔くら闇くらき樹木じゆもくのかけ、切戸きりどをそつと押開けて、忍び來るは以前の團八、跡あとに續ついて定九郎、内の様子を見廻す所に、時分じぶんを窺うかがひ奥よりそつと佐渡七が、傍あたりに氣配きけい立出でて、三人見合せ點頭うなづき指足さしあし、庭にわの邊あたりに立止り、定九郎小聲こゑになり、定九郎「コリヤ佐渡七、そちも知る通り、小野田郡兵衛のだぐんべゑ殿どのに頼まれて、衛門之助殿を殺す契約けいやく、然る所此間このあひだより此廓このくわに居續ゐつづの大騒おほさわ、聞くを幸さいひ其方そなたを頼み置いたれども、吉左右きちさう心元なく、此團八を最前入さいぜんいりましたが、何として殺して仕舞しはぬ。様子いかど」と尋ねれば、佐渡七も摺寄すりよつて、佐渡七「成程御頼み故昨日より座敷を勤め、仕累しおほせられたれば大金、殺すに油斷ゆだんは致さねども、晝夜共に末社まつしゃを集めて大騒おほさわ、附々つぎが多ければ只今までも延引えんいん。したか、又どして衛門之助殿を殺してお仕舞ひなさると、様子が篤とくと承りたう存じます」定九郎「ヲ、成程不審ふしん尤、殿衛門之助一國の主として、酒宴遊興しゆゑんゆうきやうに長ながし身持みもち放埒はなち、妾めかけは其數知れず、夫のみならず國中こくちゆうの妹娘いめよめをかり集め、或は後家あひり狩かりなどと金銀を費つひやし、様と奢おごり極きはめ、所詮しよせん生置いけおいては我々が望のぞも叶はず、郡兵衛殿と申合せ、密ひそかに殺す思案しあん、仔細しそといふは此通り」と、我身の欲を尤に、云ひならべてぞ物がたる。佐渡七は打點うちちき、佐渡七「ムン夫

で様子が知れました。したが最前團八様見えたれども、あの手ぢやいかぬと思ふた故、實事仕
を見しらかしたりや吞込んで、投げられさんした其ぎばの甘さ、イヤモウ芝居の敵役にしても
金ぢや〜」と、響めれば圖に乗り、團八「イヤ下地が有る、宮島の芝居も一年働いたて。ハ、」
佐渡七「さて衛門之助も今夜中にいぬる様子、殺して仕舞ふ思案はないか」團八「サア、いつその事
呼出して、コレ此合口でぐつさりいはして」定九郎「シイ聲が高い。此定九郎が極上々の思案有つ
て忍び入つた」佐渡七「ム、シテ、其御思案はな」定九郎「ヲ、其思案は」と夕月夜、泉水の金魚をすく
ひ、手水鉢にうつし入れ、定九郎「コリヤ此様に勢ひ能き金魚なれども、殺す思案はコレかう」と、
懷中より藥取出し、水にそよけばこはいかに、働く魚も忽ちに色を變じて死てけり。二人の者
は呆顔、團八「ハア奇妙」佐渡七「シテ此藥は」定九郎「ヲ、是こそ唐の蒼玉が傳ふる毒藥、此藥を酒に
入れ、衛門之助に吞ませ、殺して仕舞へば手間隙入らず、併し仕損じまい、のでもなし、團八
は大門口に待伏して、衛門之助が歸るを待つて只一打、爰で逃がさば出口で討取る、兩方遁さ
ぬ鑑「思案」と、聞くより團八、團八「できた〜。然らば佐渡七能い吉左右を待つて居る」ハ
ツトばかりに團八は、大門口へと出でて行く。定九郎「コリヤ佐渡七、此妙藥はそちが氣轉で、ナ
合點か」と、渡せば受取り、佐渡七「お氣遣なされますな、今宵の中に」定九郎「ヲ、でかした。身共

が顔を合しては後日の邪魔、身は屋敷へ罷歸る。随分ぬかるな」おさらば、さらばと、手筈を極め定九郎、切戸口より立歸る。跡に佐渡七一工夫、奥を窺ふ其折柄、爰へ來るは衛門之助是幸ひと佐渡七は、勝手へ急ぎ行く跡へ、奥に末社を留め置いて、高雄伴ひ、衛門之助は立出でて、衛門コレ太夫、今奥でとつくりと咄した通り、そなたと肌ふれ寐られぬといふ譯は、肌身を放さず所持してゐるやる大切な一品、其譯さへ納らば、ハテ其時はどうなりとも、合點がいたか」太夫アイ、とつくりと合點が参りました、忝うござんす」と、何か二人がしめやかに、話す間に佐渡七が、銚子盃持つて出で、佐渡七「コリヤ旦那が悪い、私等をおまきのかばやき、太夫すとお二人甘いなく」。甘い次手に何と爰で、一つ上りませぬかと、口は諸白心の惡酒、酔はしかけてぞ進むれば、衛門「チ、是はようぞ氣が付いた、サア一つ呑まうかい。サア一つ注け」さらばお酌と注ぎかくれば一つ受け、何か思案し、衛門「イヤくく」素直に呑んで面白くない。サア一拳せう」佐渡七「ハテマア一つ上つてから、跡で一拳致しませう」衛門「イヤくく」どうやら呑むに拍子がない。サアくく是非に一拳」と、いふに違背も何のその、追付けて呑まさんと、佐渡七「サア参りませう」衛門「ロマ、チエイ、ハマ、おつと三拳サア勝ちぢや、佐渡七呑め」といはれて悔り、佐渡七「エ、アノ、此酒を私に」衛門「チ拳に負たりや知れた事」「ア、イエくくめつさう

な、是を呑んでたまるものでござりますか」衛門「ムン、すりやよう呑まぬぢやまで其筈々々。コリヤ佐渡七、此酒には毒薬が入れて有らうがな」と、星をさよれて「佐渡七、何と」衛門「イヤ知るまいと思ふか、最前の物語皆聞いた、遁れぬ所覺悟せい」佐渡七「エ、仕舞うた、見紛はしたれば百年目モウ是非に及ばぬ」と相口引抜き突きかくれば、衛門之助身をかはし、刃物もぎ取り縁より下へ蹴落せば、「コリヤかなはぬ」と佐渡七は、息も切戸にかけ出て、逸散にこそ逃けて行く。此物音に亭主末社ばら／＼と走り出で、様子を聞くより廓の見せしめと、追駈け行くを、衛門「コリヤ待て／＼、詮議の有る奴なれども、身が存する旨有れば逃げば逃がせ、何もかもおれが心に取つてゐる／＼、併し太夫が身受は口中に相濟み、此所に長居は無用、ナニ亭主、太夫を連れてモウ歸らう」と、いふに九八罷り出で九八夫はお名残惜う存じまする去ながら、此間からの大騒、世上での取さた、申し管領の御耳へもはいつた様な噂、いか様もうお歸りなされたもようござりまする」衛門「ヲ、さうなうてもいぬる心、サア太夫おぢや」と立上れば、大騒「そんなら旦那、又近々に御來臨を、松の位太夫様、サア随分おままで／＼」と、たいこ中居も口々に、名残を惜む暇乞、高尾も俱に盡せぬ思ひ、太夫「お前方も御無事で」と馴染涙の袖の露、衛門之助氣をかへて、衛門「皆も随分ままで居い、又月見には、太夫を連れて大騒」と、大風にはい／＼はい

と亭主ていしゆがそより、九八「コレくたいこ衆、大門口おほもんぐちまで七賢人けんじんの、はやしでお供はコリヤよからう。サアくお立ち」と浮うかれ立つ、皆々打連うちつれ騒さわぎ行く。所は名におふ大門口、出口でぐちの柳夜やなぎの風、亂みだれ騒さわぎし折せりからに、團八は宵よひよりも、佐渡七が知らせをば、今やくと待つ所に、息を切つて佐渡七は、命からぐ、逃にげけ來れば、團八「ヤア佐渡七か、宵からほつと待つ退屈たいくつ、首尾しゆびはどうぢや」佐渡七「ア、イヤモ首尾しゆびさんく、思ひの外ほか手強たづいやつ、まだ其上みかみに客きやくに刃向はむかふ大それた狼藉らうぜき者、廓中くわくちゆうへの見せしめと、私が宿を叩たたき上げ、方々と詮議せんぎする。モウ爰こゝには居られぬ、こなんの宿に隠かくれて居る、あとは貴様きさまのお働はたらき頼たのむく」と云ひ捨て、足早あしはやにこそ走り行く。團八「エ、埒らちもない、よいく何でもおれが一手柄ひとてがら」と、肩唾かたづを呑んで大門の、傍かたへに忍しのび待居たり。斯かくとも知らずうてんつてん、唐樂たうがくの音の囃子物はやしもの、先にしづく昇かき出す、俄練物七賢人にわかねりものしちけんじん、待設まちけたる團八が、駕かごを目充めあての手練しゆれんの手裏劍しゆりけん、目充めあて違ちがへず打込めば、「スハ狼藉らうぜき者もの遁のがすな」と、呼よはる聲に團八は、しすましたりと逸散いさんに、跡をも見ずして逃にけ失うせたり。かくと聞より高尾はあわて走り寄り、高尾「ナウかなしやな衛門様、お心はいかがぞ」と、駕かごの左右さゆうを引き上げて、見れば内には著替きかの風呂敷ふろしき、是はと驚おどく後うしろより、衛門衛門之助ゑもんゑもんは爰こゝに居る」と、七賢人しちけんじんの立たちで、ぬつと出れば又悔ひり、高尾「ヤアお前はそこにござつたか」と、悦なぶ中なかにも不審顔ふしんがほ、衛門「チ

テ合點がてんの行かぬは尤もく、宵よひに來りし團八と佐渡七兩人云ひ合せ、我を討つん面魂つたましひ、我が歸るを待伏まちよせし、かよる狼藉らうぜきあらんと思ひ、そなたをあとから、駕かこの中うちなは我等が身代みがはり」漢かんの紀信きしんが計略はかりごぜ、今は憚はぶる人もなし、我身は駕かこに打乗うちものつて、太夫を先に道中みちちゆうや、席くらわをぬけし籠かごの鳥とり、跡あとに残りし友千鳥ともちどり、大鳥大名大門口おほどりだいみやうおほもんぐち、別れてこそは、三重歸りけれ。

第 二

櫻井主膳きくろふしぬだんと表札へいさくを打たねど其名隠かくれなき、阿波あはの一城じやうしゆ主玉木衛門之助殿譜代ふだいの侍しやうだい、主従しゆじゆうともに武藏野さきののの月も忠義ちゆうぎに目もふれぬ、堅かたい屋敷やしきの内庭うちにわに、掃除さうじは得手えてのやつこらさ、打つ水玉みづたまの露程つゆぢやうも、陰日かげひ向むかなく見えにける。立切たちきる一間ひきま、音ねないて、立出たちいづる女房關にようぼうのかんの戸ど、華美はでを好このまぬ襦うすかけの、姿心すがたこころもしとやかに、開ひらの戸ど、テ、庭にわの掃除さうじは又平鐵内またへいてつない、日番ひばんの勤ごん怠たりなく二人共大義たigy々々、殊ことに夫ちうごは昨日きのうより管領くわんりやう職しやくの御召ごめいにて、今いまにおいて歸りもなく、御用ごようの筋しんは知らねども、さのみ氣遣きぢやうふ事も有るまい、歸られ次第しだい用事ようじもあらん、せめてしばしの内なりとも、部屋へやへ行て休息やすみしや、早はやうく」といたはる下部しもべ、「然らば御免ごめん」と兩人は、勝手かたてへこそは立つて行く。取次役とりよせの婢こしもこどもばらくと走り出で、腰元こしもと申し、奥様おくさま、前方まへかたお館つみめに勤ごんられし中間ちゆうかんの十郎兵衛殿じゆじやうべゑだん、何やらお

願の筋有るとて、お次にひかへて居られます」關の戸「ム、なに十郎兵衛がわしに逢ひたいとな、何はともあれ爰へ呼びや。早うく」に婢ども、其儘立つて入り来る。館の住居かはらねど、かはる姿の十郎兵衛、勘當の身の幅もなき、身すほらしけに踞る。關の戸「ヲ、珍らしや十郎兵衛、歩中間とは云ひながら主膳殿の心にかなし、立つにも居るにも十郎兵衛と、情が怨と成る世の中、連合の氣に背き國を出やつてもう六年、顔は見ずとも使でも聞きたいとは思へども、夫の氣質を計りかね、案じ暮せしそなたの身の上、お弓も無事で出来た子も、息災でゐるかいの」と、残る方なき關の戸が、尋ねも深き三世の縁、身にしみ渡る十郎兵衛、涙とともに兩手をつき、十郎「奥様の仰の如く、見る影もなき私を人らしく思召し、重々厚き旦那の御恩、報ぜん事もあさましや、酒に犯され、郡兵衛殿の家來と口論の上、手疵負し拙者があやまり、縛首にもあふべき所、喧嘩兩成敗と有つて兩人ともに御追放、己やれ今一度、何卒旦那のお爲になり、御勘當の詫せんと、思へど叶はぬ足手纏ひ、三つに成る娘をば國元の母に預け、女房連て大阪の、知己を求め五六年、うき世渡りは致せども、御主人のお身の上拜まぬ日とてはござりませぬ。女房めが申すには、お赦の出る迄はお國へは入る事かなはず、承はれば今年は此地にお渡り遊はさるる、折を見合せ勘氣の願ひ、平に是非にと諫められ、心は先へ飛立ど、はいりかねたるお屋敷の、

御門前に一時餘り佇む中に門番衆が、咎を機會に漸と、昔の誤り今の身に思ひ當りし此身の
上、叶はぬ迄も御赦免の、詫の綱手は奥様のお情お慈悲」とばかりにて、先非を悔みし男泣、
心を不便と思ひやり、關の戸ヲ、其悔は道理々々、今日そなたが來たこそ幸ひ、よい時分に呼出
さう、最早歸りに間も有るまい、次で待ちや」といふ間なき、且那の歸りと下部が聲、知らせ
阪さ奥庭へ、いそぐ立つて入りにける。早立歸る櫻井主膳、常には酌ぬ盃の、廻り過たる無意
氣酒、羽織の肩の滑れるも知らず、ひよる付く足元、「ナウ危なや」と關の戸が、取手をじつと
引寄せて、主膳ヲツト開かせ給ふな北の方、手前お上より歸りがけ、思ひ付いたる葭原の揚屋で
數獻下され、其上有り難い御意の趣、話して聞そか、イヤくよしに致さう、ア、面白い手管
の諸譯、聞きたからうがマアならぬ、何と憎いかく「關の戸」ホ、は、是は又ついに覺ぬ醉姿、か
様な事と知つたらばお乗物でも上げう物」主膳「ナ、何とのたまふ、我等醉は仕らぬ、堅いそも
じのお迎より、幫間中居に送られて、漸只今古きを去て新しう、外へとめ木の香箱に、かけ
とひなたの二つ紋、付けねばならぬ我等が心、お氣に入らずば御勝手次第、はべくはの暇の狀、
書いて進上申さうか」と、酒がいはする戯言に、悟氣の口を閉られて何と云寄る片男浪、騒ぐ
胸をば押鎮め、關の戸「ナ、あのおつしやる事わいの、折々左様の御樂しみも、且は御身の御養生、

私が何と申まじよ」主膳「ム、夫でこそ主膳が女房。替めく」と背たよき、いやといはさぬ釘
鏝、打てば響す表の方、「小野田郡兵衛様御入なり」と、取次の聲に驚く女房、關の戸「ア、申し今
のを御聞なされたか」主膳「ア、成程、お國の御家老、郡兵衛殿のお入りなれど、此體では逢れ
ぬ逢れぬ、我等暫く睡眠致さん、宜しく計ひ給はれ」と、廻らぬ舌を巻きかける、管も纏るよと
ろとろ目、奥へ行くさへ千鳥足、衣紋繕ひ關の戸が、出向ふ間もなく小野田郡兵衛、兼て心は
隔の襖、さも荒げなく入り来る、顔も詞もにがくしく、郡兵「コレサ關の戸殿、只今勝手に主
膳殿とは尋ねれば、館にござると承はつたが、手前が参つたと聞いて、最早おはづし召された
かな」關の戸「是は又あられもない、お珍しいお前のお下り、悦びこそすれ何のあなたに隠れまし
よ、去りながら明るに間なき夏の夜の、勞を暫し奥の間に、ソレ女子ども、郡兵衛様の御出と、
主膳殿へお知らせ申しや、早うく」の内よりも、主膳「櫻井主膳、それへ参つて御對面申さん」
と、よからぬ中も面に出さず、上下改め一間を出で、主膳「是はく、お下りの噂もなければ、
思ひよらざる今の對面、いつ見ても御無事さうで先は重疊」郡兵「アイヤ主膳殿にも堅固の體、
我とても衛門之助殿の家老といへど、殿様なしの田舎住居、貴殿はそれに引きかへて、花のお江
戸の家老職、御主人のお膝元と云ひ、跡腹痛ぬお樂みで、御夫婦ともにきつい若やぎ、イヤハ

「ヤお羨しう存ずる」主膳「是は郡兵衛殿の、女夫の者を悄氣ささうでか、サア、是へ、まづ是へ」と、合ぬ工合を間に合せて、持長すれば、圖に乗つて遠慮會釋も高上り、櫻井主膳威儀繕ひ、主膳「最前主人に御意得たれど、其元のお噂もなかりしが、到著召れたはいつ何時、シテ殿には御對面濟みましたか」郡兵「ア、いや、國元を出ましてより昨日迄十日の道中、思ひがけなう参つたは、ちと折入つて其元へ、相談致さねばかなはぬ故、未だ主人にも對面逢はず、参りがけに山口定九郎殿へ立寄り、直様是へ参りし所、貴殿のお顔を見受ぬから無禮は眞平」主膳「是は又痛入る、用事と有らばゆるりつと、打ちくつろいでお物語。コレ關の戸、早いが賞玩ついちよつと一種一瓶申付きやれ」關の戸「ほんに私とした事か、最前より取紛れお茶さへも上げませず、お赦しなされ」と立上る。郡兵「アいや奥方お心遣ひ無用々々、茶も酒も所望になし、しかし主膳殿のお志、無下に致すも本意ならず、迎も御雜作に預り次手、只一色の肴には、主膳殿のお手際、すつぱりと切腹めされ、夫を肴に一獻酌ふ、奥方早く御用意」と、聞きもあへず膝立直し、關の戸「申し夫主膳には何誤り、何科有つて腹切るのぢや、麓忽な事おつしやつたら、お國の家老とはいはしませぬぞ」主膳「女房黙れ、假令いか様の事あるとも、郡兵衛殿の差圖を受け腹を切る某ならず、殊に又切腹と有れば家の大事、左様の大事を舌三寸申し出た其仔細は」

郡兵「問ふに及ばぬこなたの胸に覺有る今度の誤り、御先祖より代々續く、浪風立ざる家筋なれども、主膳といふ馬鹿侍にたらされ、毎日毎夜の廓通ひ、管領家の沙汰大方ならず、御主人には閉門との噂、聞くと其儘此家へ來たは、貴殿の口からいはずはさんため、サア有りやうに白狀々々」主膳「ハ、ハ、何事かと存じたれば、イヤモ其義なればお心遣ひ無用にめされ、微塵いさゝか覺なき廓通の御取沙汰、手前の殿の名を借つて奢を極めし紛れ者、尋ね出す其間、五十日の日延を乞請、やすらかに事を納め、主人を供せし某に切腹せよとは何の癡言」郡兵「ホ、夫程の義知行米を戴く代り、生れ子でも申上うが、若又其尋ぬるやつが其元の手に入らぬ時は」主膳「念に及ばぬ切腹致す」郡兵「ム、貴殿が腹をめされば、衛門之助様の御身が晴ますかな。イヤサ濟むと思さば今爰で、切腹を見届ませう」爾の戸「イヤ郡兵衛様お控へなされ。イヤ申し主膳様、お二人の争ひを、聞けば聞く程只ならぬ、主人の御事お前の身の上」主膳「チ、様子知らねば道理々々、知りやる通り某急のお召と聞くや否、取る物も取りあへず、屋敷を出る其折から、主人も俱に御前へ參るべしと重ねて向ふ使者の口上、途中にて出合頭、直様主君の御供申し、承りし其趣、衛門之助其身の徳を甲に著て、日々の奢はいふに及ばず、剩へ吉原の廓へ入り込み、毎日毎夜の藝盡、又或る時は時ならぬ、月雪花の催にて、名有る太夫も我一と馴染重て手に手を取り、屋敷の内も廓同

前、武士に似合ぬ三絃太鼓、現ぬかして大名の家名を下すは何故ぞ、早く言譯致されよと、尋ねの内も立板に、水を流せる主人の返答、十が九つ其座にて、申譯は立ちたれども、衛門之助と云ひふらし、訴出たる上なれば、其名を付たる紛れ者、五十日の日延の内、某急度吟味を遂げ、主君の言譯致さんと遮つて願ひしかば、早速に相叶ひ我は夫より吉原へ馬鹿に成つて窺ふ所、衛門之助といひふらし、上もなき大騒にて、立歸つたる残念至極、イデ追ひかけんと思ひしが、イヤく、一旦此場の陣を引き、ゆるかせに詮議せずば、捕がたしと思ふから、我も是より身持放埒、主人の爲の遊興は、毒を以て毒を消す、主膳が極めし胸の内、連添者にも深く包み、情弱に見せし、詮議の第一「郡兵イヤ主膳殿おかれいく、潔白らしう聞ゆれど、管領よりの仰の通り、衛門之助殿を唆かし、高尾といへる太夫を身受けさしたもこなたの計ひ、疾く存じておる某に、うはぬんめりの突付賣、其手では行かぬ、もうよい加減にいうて仕廻れ」主膳「マ、左程實正御主人を、御供せしといふ」郡兵「マ、慥な證據見せませう、山口定九郎殿、最前の女是へ同道めされ、早うく」「畏つた」と定九郎、連立つ姿振袖の、打かけ模様外ならぬ、實も廓の風俗と、紛ふ方なき其粧ひ、郡兵「主膳殿見られたか、今日是へくる道すがら、此者に出合ひし所、主膳様のお屋敷はと尋ぬる餘り、様子を聞けば右の段々、山口殿諸共に同道したる此

女、何と覺えがござらうが」主膳「イ、ヤ存じませぬ、拙者此江戸表に罷り居れど、吉原へ參つたは夜前が初め、傾城にもせよ何にもせよ、手前毛頭近付ではござらぬ」高尾「ヲ、さうでござらんす」爾の戸「イヤ申し女中様、是に居らるゝは私が夫、櫻井主膳と申しますが、お前の尋ぬる心宛は、どこへお出でなさるゝへ」と、問れて高尾もうちにつこり、高尾「ついにおめもじいたさねば、お顔見知らう様もなし、お名は違はぬ主膳様、私はお前の御主人衛門様に受出されし、高尾と申す者でござんすが、衛門様のおつしやるには、屋敷の内は人目あり、櫻井主膳と名を云うて、何ぢやあらうとそこへ行け、委細は文で跡からと、教の道もあとや先、尋ね迷ひし折からに、あなた方のお目にかより、尋ぬるや否、無體に私を駕にのせ、連れて見えた此お屋敷、わたしや何にも知らぬ事、悪い所はよい様に取りなし頼み上げます」と、聲さへしどけなまめけり。櫻井不思議の顔色にて、主膳「ム、心得ぬ高尾の詞、我れを目充に入込せしは、某に越度を付け、切腹させんすたくみごと、コリヤく女房、詮議ある高尾太夫、奥へ伴ひいたはり置け、給はる日延の今日より、其曲者を尋ね出し、主人は勿論此身の言譯、さつぱり仕上げてお目にかけう、山口わけい」と立上る。定九郎「イヤさうは得致さぬ、拙者貴殿の組下とはいへど、疑ひかかりし其元なれば、屋敷の内より外へとては、一寸も動さぬ、それが互に身の潔白、何と郡兵衛

殿、左様ではござらぬか」「中々左様、譬貴殿がいか様に尋ねられても、左程の大事を仕出すやつ、めつたにお手には入りますまい、いらぬ事に骨折つて、跡で後悔なされうより、身が前で切腹々々、彌主人に科なくんば、誤ない義を申上げ、家を立つるは拙者が役目」關の戸「イヤ申し、夫が詮議致さうと、承つて立歸つた、御前の指圖に違變はあるまい、さすれば吟味も此方から尋出す、此役目十郎兵衛、おぢや」と關の戸が、差圖にはつと立ち出る、心勇のひらく肩、關の戸「イヤナウ十郎兵衛、聞きやる通りの品なれば、主膳殿になりかはり、殿の名を銜し曲者、一時も早く詮議仕出し、夫に手渡しする氣はないか」十郎「何が扱最前より、始終の様子承はり、出るにも主人の傍、お前様のお情で、結構な役目をたまはる、此勢に一詮議、拙者にお任せ下され」と、聞もあらせず、郡兵「だまり上らう、郡兵衛が前とも憚ず、誰が赦して此家へうせた、うぬは元國元で、身が家來に手疵を負せ首ぶち放す所を、是なる主膳がぬつべりこつべり、命助る其かはり、一生脚は切込さぬと、潔白らしういうて置いて、内證で呼びにやり、此詮議ささうなどとはのぶとい詮索、侍の禮義も知らぬ、犬同前の己等は、庭の小隅で尾をふり廻し、捨扶持喰ふがよい役」と、あく迄惡口こらへかね、短氣の十郎兵衛立ちかよるを、押ゆる目遣ひ、「ハアはつ」としづまる弱身へ付込し根惡る。郡兵「屹相かへて立ちかよるは、此郡兵衛に刃

向ふのか、慮外なやつ」と傍なる茶碗、眞額砕けと打付れば、眉間に當つて流るゝ血汐、猶もこらゆる無念の顔色、郡兵サア云分あらばぬかして見よ、刀脇差さすやつならば、よもや云分有るまい」と、いへど主膳も理の當然、はたとふさがる、關の戸も、何と開かんやうもなし。折から下部があわたどしく、下町京都の町人藤屋伊左衛門と申す者、御詮議の手がかりあつて、お且那へ直談と申し、次に控へ罷りある、通し申さんや」と窺へば、主膳、ム、何にもせよ詮議の手筋と有るからは、遠慮に及ばぬ是へ通せ、關の戸は先奥へ、高尾太夫を同道仕やれ、十郎兵衛も早歸れ、勘當しても主の内、願ひに来るはまゝある事、咎に及ばぬそちが身の上、用事あらば重ねて聞う、早々立て」とどこやらに、こもる詞の締括、すゞく立つて行く姿、見やる女房も奥の間へ、しをれし枝におく露の、身にぞ知られて咲く花は、名にし藤屋の伊左衛門、馴し屋敷も改めて、白洲にこそは畏る。主膳、珍らしや伊左衛門、互の無事は語るに及ばず、まづ何は差置詮議の手がかり、殿の災難此身の難儀、いはすとも能く知つたり。シテ其方が手がかりとは、いか様の筋なるぞ。早くいへく「伊左、ハアイヤモお氣遣遊ばすな、其お尋者が知りました」主膳「何尋ぬる者が知れたとは、シテ其者の有所は何國、假名實名何とく」伊左「イヤ外までもなく、葭原狂ひに殿様のお名を汚せし大罪人は、則ち私でござります」と、思ひがけなきに詞

不審、一ばい晴ぬ小野田郡兵衛、大口明いて高笑ひ、郡兵ハテ様々のやつがうせて、大切な詮議の腰折、ヤアく佐渡平、アン引立て」と呼ばれば、はつと答へて立出つる、顔は互に見て悔り、伊左、ヤア、ヤアわりや葭原で幫間の佐渡七、じやがの團八と云合せ、此伊左衛門を殺さんとせし其方が、爰へはどうして、其形は」と、いはれてきつくり郡兵衛が、知らず目の内呑込む奴、佐渡平「ヤア素町人め慮外千萬、一合取つても武士の家來、幫間とやら鼓とやら、ない名を付くるうぬは何やつ、見た事もない毛二才め、主人の御意ぢや、きりく立う」伊左「ム、アノお侍の御家來なら、猶以て詮議がある」佐渡平「ヤア細言いはずとうせおれ」と、肩口取つて引立つる。櫻井主膳「暫」と留め、主膳「殿の名を銜しと、申出でたる大切の科人、其儘にして次へ立て」佐渡平「主膳様控へ召れ、主君の御意は背かねど、其元の差圖は受けぬ」主膳「ヤア己れ中間風情の様をして詞を返す慮外者、早く立てうせおれ」と、はつしと投げる火入のさそく、頬にべつたり石灰も、染る血汐は十郎兵衛が返しと知らぬ短氣の奴、刀の鯉口留むる郡兵衛、郡兵「佐渡平下れ、疵は受けても苦しうない、定九郎殿と諸共に歸れく、何もかも此の胸に、ナ、サア無念をこらへ旅宿へ歸れ」佐渡平「ぢやと申して是が」郡兵「ハテ歸れといはば早うせう」と、きめて歸すは主従の、胸の一物向ふ疵、のり押ぬぐひ立歸る。櫻井跡を打見やり、主膳「サア、伊左衛門、そち

一人がわざにもあるまい、何者に頼まれしぞ、包まず明せ」と和かに、問はるよを汐ににじり寄り、伊左「隠しても隠されませぬ、元の發は葭原の、名さへ色ある高尾とて、振袖なれど天晴な、器量勝れし太夫職、ちよつと見初めてそれよりは、夢ともなく現にも、只忘れぬ其面ざし、思出す程猶どうも、任せぬ此身は町人なり、高尾にもせよ誰にもせよ、太夫と名がつきや大名道具、町人風情がいか程に金銀積んでも怪我な事、買ふ事ならぬが廓の掟、叶はぬ事に骨折らずと、儘よと思へど儘ならぬ、戀は曲物心の外と、思ひ付いたる大名出立、玉木衛門之助様と言ひふらせし上からは、手討にあふは覺悟の前、是より外に露いさよか申上ぐる詞なし、一時も早く成敗なされ、御不審かよりし申譯、偏に頼み奉る」と、命を塵と投出した、傾城狂ひの白狀は、様子ありけに見えにける。郡兵衛一々聞きすまし、郡兵「ム、さうぬかしや違もあるまい、暫しも主君を苦めし、其首刎て埒明けう」と、立上るを、主膳「先々暫く、彼が成敗を貴殿にさしては、此主膳は何を以て申開き仕らん、差圖を受けし拙者を指置き、其元が手討にして、又もや我に誤り付け、追失はん御所存か」郡兵「イヤサさうでは」主膳「ないと思さば暫が中、奥へござつて休息めされ、彼にもとくと覺悟させ、せめては念佛の一遍も、唱へさするが未來の爲」郡兵「ハテどうなりと勝手に召され、しばらく奥で相待つ中、ぶち落して仕廻れよ」と、理非を糺

さす殺したがる、詞の意地は夕霧に、叶はぬ戀の意趣晴し、爰で持込み立つて行く。とは知らずして櫻井主膳、主膳「身を失ふも戀とはいへど、惚た計りに輕々と一命捨つる其方ならず、御恩ある殿様の御難儀と聞付けて、科なき其身に拵し科人となる志、御主人にもさぞ御満足、併し此度の事計りは、誠の科人の知るよ迄は」伊左「ハテ疑深い主膳様、惚た印は互の誓紙、高尾の方から送りし起請、是見て給べ」と懐より、取出し渡す紙包、其儘取つておしひらく、内は白紙に巻添し、小柄を取つて見て悔り、主膳「ヤ、此小柄こそ先殿のお胤を懐せしお惚へ、後の印と給はりし、三疋獅子に家の定紋」伊左「サ、惚たと申すはその小柄」主膳「ム、シテ是を所持せしおかたは」伊左「先達つて此屋敷へ、御入りありし高尾様、早々是へ御出で」と、呼れてはつと關の戸が傳申す先殿の、姫も今更改る、主従共に深切の、嬉し涙に父の恩、昔を思ひ忍び泣き、主膳威儀を改めて、主膳「先殿御死去の砌より、お前様のお行方を、諸所方々と尋ねれども、今迄知れざる主人の御胤」伊左「サア私もお噂を承はつてをります故、惚たと申すも其小柄、葭原に置きましては、お家の瑕瑾と存するから、惚れてく、惚れぬいた、太夫の身受け、大名の名を衒たる入譯、くどういはねど主膳様、御得心なされたら、一時も早く御成敗、ハテ死でしまへば事濟」と、さつぱりした男ぶり、隠れ浪花の夕霧と、つがひ離ぬ蝶々の、花に飛びかふ中ならん。櫻井主膳

感じ入り、主膳「殿のお胤を葭原にて傾城遊女と云ひふらさば、家老を勤る我々が誤り、其誤りを隠したる其方なれば、助け置きたき者なれども、郡兵衛を始とし、高尾様を先殿のお胤と云ふ事、我口より露顯して、上へはどうも打明られぬ、さすれば御前で受合うた、紛れ者の詮議を正し、主人の明を立つるが第一、不便ながらも伊左衛門、覺悟せよ」と言放せど、心は健氣と感する涙、姫も涙の顔ふり上げ、帯は解ねど自は、情を受けし伊左衛門、只一言の禮もよなく、又わし故に殺すとは、餘り氣強いどうぞマア、あの人の命を助けかほりには此高尾、とても一度は葭原に濡し此身を今となり、大名のお姫様と、ふつつりいうて下さんな、やつぱり仕付た道中が、わしや嬉しい」と、どこやらに、こもる涙は一筋に、落ちて流の身にぞ知る、追に殿の御胤と、背撫でさする關の戸が、又も涙にくれ合時、主膳「ヤア、伊左衛門、最期を知らず暮六つの、かねての覺悟奥庭へ、我も用意」と立上り、姫を伴ひ入りにける。待に待たる小野田郡兵衛、刀提け奥より立出で、郡兵「是は内室、主膳殿には、伊左衛門めが首打ちめされたか何とてござる、イヤサ關の戸が、胸にこたふる夫が聲」主膳「科人伊左衛門が首、不便には存ずれど、殿内、響く太刀音關の戸が、胸にこたふる夫が聲」主膳「科人伊左衛門が首、不便には存ずれど、殿の名を銜たるお家の爲の大罪人、御覽なされ」と首桶の、蓋押明けて指出す。伊左衛門には似

ても似ぬ、郡兵コリヤ何者の首、伊左衛門めはナ、何と召された」主膳「ホ、驚きは理、此首こそは佐渡平に方人したる競組の團八と申す者、褒美のわけ口貫はんと僅な金に目がくれて、貰ひに來たは此奴が不運、思ひ計つて某が、裏より廻して此通り」郡兵「ヤ何が何と」主膳「チ、知るまいと思召すが、最前歸つた佐渡平め、伊左衛門と顔見合すが否や、互に驚ぐ其座の模様、聞合すれば葭原で、殿と申うて切込だれば、伊左衛門より大事の科人」郡兵「ヤア黙り召れ、佐渡平めは國元より、召連れた身共が家來」主膳「イ、ヤさうは言はさぬ、夜前此地へ到著召れた其許、其又家來の佐渡平が、伊左衛門とは何國で顔を見受けましたな」郡兵「サア夫は」主膳「たつて争ひ召るよと、追ひ返された奴がかはり、御自分にも詮議がかより、切腹召れずばなりませんまい、そこを存じて此所へ、折幸ひな此首を、藤屋伊左衛門と名を記し、科の次第書顯し、鈴の森にて獄門にかけ、死骸は則ち京都の親元へ送届くる上からは、伊左衛門は死にたると同前、助けて殺す拙者が政道、遠變でござらば此首の、科を顯し申上けうか」郡兵「サア夫は」主膳「何と違背はござるまい」と事を納める主膳か情、小庭に聞きるる伊左衛門、しほくとして手をつかへ、伊左「お志は有難けれど、若し贖物と此事が、お上へ知れよば御身の難儀」主膳「ホ、其義は少しも氣遣ひなし、お咎あらば汝が次第、申開きは胸にある、とは云ひながら伊左衛門、假にも成敗した

る身の、此後幾年ながらへても、藤屋伊在衛門と名乗るか否や、其時こそは見遁しならず、打つて捨てるが掟の第一、高尾太夫が身の上は、某慥に預つたれば、そちが頼みし親元へ、急度渡してくれんす」と、餘所を憚る表向、首桶だかへ立上り、主膳「郡兵衛殿も其儘御前へ、御苦勞ながら」と挨拶に、返答しかなのむしやくしや腹、常り眼に角立て、郡兵「ヤア家來ども伊左衛門めをほい捲れ」と、呼はる聲も割竹の、情用捨もあらしこに、追捲られて伊左衛門、名計り消えて生残る、姿弔ふ親里へ、立寄る事も渚の千鳥、泣音不便と見送る夫婦、必ず無事と一言も、いふにいはいはれぬ關の戸が、今ぞひらくる櫻井の、色香争ふ難波瀉、名も夕霧に逢阪や知るべの方へと三重行雲の。

第 三

下總と、渡せる橋は兩國の、國境をば名に呼し、橋のあいりも見えわかず、猶降しきる夕立の、篠を亂せる雨の足、夜目にもそれと蛇の目傘、えならぬ工の二人連、兩國橋にさしかよる。定九郎「コレサ佐渡平、郡兵衛殿の頼みにより、謀し合せし今宵の手番、主膳が歸るは此道筋、有無を云はさずたつた一討ち」佐渡平「ア、定九郎様聲が高い、モ私も腹からの町人でもなく、刀さす譯も

知つてをりましたが、兩親に見放され、せう事なしの牽頭持、郡兵衛殿の口に入つて一大事を頼まれ、おのれやれ此役目仕負せてくれんと、思ふに違ふ葦原のしだら、殿ではなうて伊左衛門、南無三失策してのけたと、思の外咎もなく、佐渡七を其儘に佐渡平といふ不中間、ガ是といふも郡兵衛様のおかけ、お禮には主膳めをすつぱり殺して了うたら「定九郎」ヲ、云ふにや及ぶ上分別、某櫻井が組下とはいへど、國元にありし時郡兵衛殿に心を寄せ、兼ねて主膳が預り居る殿の重寶國次の刀、人知れず盗み取り渡し置いたる今日迄も、盗まれしと云ふ評議もなく彼是もつて心得難し、彼奴が心底間に及ばず殺すが近道合點か「佐渡平」氣づかひ有るな」と兩人が、點頭き叫く其内に、雨もをやめ傘傾け、今や遅しと待ちゐたる。かくとや様子知らねども、蟲が知らずか十郎兵衛は、主人の歸り待ちわびて、勘氣の願ひせん物と、心當どは橋の元、待つとも知らぬ闇紛れ傘はたと行き當り、十郎「ハツア御免」と云うて行過ぐる。うろたへ奴が段平物、「主膳やらぬ」と切り付けるを、落ちたる傘ではつしと受け、十郎「さういふ聲は中間佐渡平、主君の名を呼び切り付けたは、思ひ違ひの油斷させ、此十郎兵衛を殺す工か何にもせよ心得ぬ、胸に有る事撤出せ」と、拔身刎られ佐渡平が、星をさよれて返答も、破れかぶれと性根をすゑ、佐渡平「様子知らねばとてももの事、ぶち撒いて云つて聞かさう、高は主膳を待受けて殺して了ふ此方の思案、思

ふ圖へ來た汝が不運、主も家來も生けては置かぬ、觀合ひろけ」と又切る刀、「惡戯すな」と引摺み身動きさせぬ後より、只一打と定九郎が、騙し寄つて切りかくるを、持つたる刀で丁と受け、十郎「二人ならず二人まで、誰ぞと思へば山口定九郎殿か、こなたも主人を殺しに來たか」定九郎「チ、推量の通り、佐渡平と謀し合せ、待つてゐた此道筋、汝から先へ了うてやる。叶はぬ腕立て取置け」と、佐渡平諸共詰寄れば、荒氣は返つて主君へ不忠、一旦詫るに若くはなしと思案を極め、兩手を突き、十郎「ム、理にもせよ非にもせよ、意趣遺恨はまゝある習ひ、是とてもまつその如く主人に恨あるに寄り討たんと狙ふ今宵の仕誼、モ無理とはさらしく思ひませぬ去ながら、我とても勘當の身分、何卒主人に詫言立て、最一度家來と云れんと思ふが故の頼みより、モ外には何と露ほども惜からん此命、サコレ主人の代に今寢でモ一分様に刻でなりとも、お二人の御存分、サ、手向ひ致さぬ、サコレく十郎兵衛が心の内を思ひやり、せめては武士の忠義をば、コレ立てさせて下され」と、投出す命主の爲、塵とも思はぬ兩人が手引き袖引き膝を衝き、忠義の胸の眞實心、思ひやる程殊勝なれ。定九郎「ヤイ十郎兵衛主膳がかはりに汝を殺したら其方の勝手はよからうが、夫では此方の工面が悪い、汝が主に忠義を盡せば俺も又主の云付け、手向ひせずと尋常に臺座からマアはふり出せやい」佐渡平「チ、さうぢやく、主膳が替りに死に

たかる汝われから、マア仕舞しうてやろかい」十郎「サ、其段は尤なれども始はじめから云ふ通り、手前が命を捨てる替り、ナコレどうぞ主膳様のお命を」定九郎「ヤアならぬはい」十郎「サアならぬ所を聞入れるが武士の情なさけぢや。申し定九郎様。是佐渡平殿。十郎兵衛が手を合して、モ一生に一度の頼み、是拜まがみます、頼ます、申し、是申し頼ます」定九郎「エ、喧やかましいわい、頼みます」と、暗中くらがりで駕籠かぶこ昇かくやうに、何ほ願ねがひ叩たたいても、そんな事聞きく耳持たぬ、埒あかの明ぬ事云はうよりとつとと早う斃くたれ」と、蹴け上ある足首あしむねしつかと取り、十郎「ム、スリヤどの様に云いても御主人を」十郎「ヲ、くだい、ム、モさう云いや此方こつちも百年めぢや、主人の仇あだとなる儕われら等、コリヤもう此方こつちから生いけては置かれぬわい」定九郎「コリヤ面白い、さうぬかしや身が有つて相手に仕よい、忠義ちゆうぎ立たてに死しにたくば望ねがひに任まかせ殺してやる、定九郎が刀の引導いんどう受うけて冥途みやうだうへつと走はれ」と、切込む刀やいばかゝ潜ひそり、鏢つば元もとむづと佐渡平が、同じ拔身ひきだの稻妻いなづまや、又も降りくる雨につれ、空も閃ひらめく稻妻いなづまの、光りを幸あひ十郎兵衛が、二人を相手に根限こんかぎり目覺めざしかりける 三重働みやへに、定九郎佐渡平逃支度にげしだ、何國なにくにを當あて正體せいだいも、轉まつまるびつころくく、起上たる定九郎が脇腹わきはらぐつと氷この刃やいば、はふくく逃出にげだす佐渡平が肩先かたさき丁ていと切下きけられ、うんと計はかりに倒たふれ伏ふす、肝先かたさきぐつと、とどめの刀やいば、空晴はれ渡る橋の上、見付みける主膳しゅぜんに見合あはす顔、十郎「ヤアお旦那には只今お歸り」主膳「ヲ、何者かと思

へば十郎兵衛、見れば人をあやめし體口論なるか、いかにく」十郎「ハツアなる程御推量の通り、郡兵衛の頼に寄り定九郎佐渡平と申合せ、此所に待伏してお前様を殺さん工、モ悪いやつと存するから、兩人共にまつこの通り、只今とどめ致せし」と、聞くより主膳大に驚き、主膳「ム其兩人こそ某が詮議の種となるべきやつ、去るによつて我屋敷で追歸せしを其儘に、捨置たるは深き所存、伊左衛門が云ひしごとく、吉原での狼藉を思ひ廻せば小野田郡兵衛、重々かさなる科人の詮議の元はナソレ其佐渡平、引掟へて白状させんと思ふた思案も皆はづれ、やつぱり我身にかよる難儀、エ、しなしたり残念や」と、悔を聞いて十郎兵衛、居たる所をどつと坐し、十郎「エ、下司の智慧は跡の悔、お前様のお命が助たい計りで、さやうの所へ氣もつかず、殺せしは我誤、是も何故御主人に勘氣の詫の種にもと、極めし的も又それて此身に當る主君の罰、眞平御免下され」と落たる拔身拾ひ取り突込まんとせし所、櫻井「暫し」と押とどめ、主膳「此儘死るは犬死同然、今の命を存命て一つの功さへ立つるならば、勘當赦して元の主従、そこへ心は付かざるか狼狽者め」と撈取る刃、十郎「スリヤ私が一命を、かばい下さる御主人のお心は」主膳「ホ、主従となる事も深き因縁、武士の義理にて捨たる其方、功のたて様よつく聞け、殿の重寶國次の刀代々預る我家筋、過つる霜月廿六夜、例の日待と一家中招寄たる其夜より、紛

失して有所知れず、慥にそれと推量はしつれども、是といふべき證據もなく、忍びやかに詮議せんと、思ふ折から小野田郡兵衛佐渡平に申付け、殿を害せんとせし極悪人、今打明ぬも國次の刀の有所を聞いた上と、手延にせしは主膳が越度、今更云うて返らぬ事、力となるは十郎兵衛舊恩を思ひなば、命にかへて刀の詮議、それも長うは延されず、三月三日は殿の誕生、飾る吉事にはづれては櫻井が家の大事と有つて、我手では吟味もならず、主持ぬ身の氣さんじは誰憚らず詮議せよ、此役目さへ仕課なば、以前にかはらぬ主従の、約束變ぜぬ證據ぞ」と、一腰脱いて指出せば、其儘取つて押戴き、「盡ぬ主君の御一言、こたへくし四十四の、骨々は碎くるとも、奪ひ取つたる刀の有所、詮議の手始御覽あれ」と、のたれ伏したる定九郎が懐中さがせば紙入に、たしなむ金子は十郎兵衛が肌にしつかと用意の路金、主膳「ヤレ待て十郎兵衛、金子は悪か塵一本、取掠めては忠義にならぬ」十郎「がハア御意ではござれども、主君の爲の切取は武士の習、盜賊術と身をやつし、盜の手本は五右衛門の銀十郎と名も改め、貴人高位の門までも、只人知れず刀の吟味、拙者が胸に覺えの内、そつとも氣遣ひ遊ばすな」と、主命重く身に受けし、阿波の海賊十郎兵衛が盜賊術の始りは、斯とぞ思ひ知られたり。主膳傍に心を付け、主膳二人の死骸此儘に討果せしと云ひ觸らさば、咎もあるべし去ながら、人の見ぬ内影隠せ」はつと計り立

上り、十郎「何れ吉左右致すまで、必ず御短慮ばし」主膳「テ、何が扱我とても、随分堅固で便を待つぞ」おさらばくと雙方へ、立別れんとする折節、郡兵衛か下部と見え、主を迎ひの箱提燈打消す主膳十郎兵衛は行方、しらす。三重

第四

浪花津に、いづれはあれど取りわけて、分限長者の寄り所、今橋筋の軒ならび、其名も絆屋三郎右衛門と人にしられし家柄も、夫に離ると不仕合せ、商ひ萬事不手廻りに、今は世間を遁塞の、身は氣さんじの二つ鬻、娘一人を蟬化と、外にながめはなかりけり。春風に裾吹きそらす取り装は、さながら武家の奥方と一目に、しるき供廻り、若黨中間徒士の者、其外笠籠挾箱、三郎右衛門表口、案内乞うて立ちやすらふ美々しき體に後家おまき、番頭の庄九郎、連て戸口に手をつかへ、おまき「どなたかは存じませねど、お歴々のお女中様、御用あらば先づくあれへ」と、詞にこなたは打通り、おまき「ついに逢はねは不審は尤も去ながら、氣遣ひめさるゝ者ならず、わし事は阿州の家中、安松數馬が女房弓といふ者」と、聞いておまきが手をつかへ、おまき「是はく思ひも寄らぬ、夫三郎右衛門存生の時は、殿様の御用を聞き、數馬様にもお目かけられ、お心や

すうお屋敷へも毎度お出入、御厚恩に預かつた數馬様の奥方様、當地へお越は夢にも存ぜず、不寐たらけも女子の身、お赦し遊ばして下さりませ。コレ庄九郎そなたなりとも袴羽織」と、いふをこどもで、お耳其儘々々、此度殿の御用に付き、夫數馬も藏屋敷迄罷り登る、幸の事と思ひ、夫へ願うて京内参り、いはど忍びの事なれば、嫉はしたも遠慮いたし、今日は町方見物のついでがてら、身まかられし三郎右衛門は、念頃の有つた故、立寄たも夫の差圖、必ず心遣ひは無用ぞ」と、いふ内用意の挨拶、明けて家來がそれくに、直す手土産目録書、戴く手代が押開き、手代羽二重一疋おまき殿、白縮緬一卷御息女へ、郡内縮一反支配の手代へ、其外家内へ金子千疋「おまき」是はまあくお冥加もない、家内の者迄つどくのお心付け、お禮申しや庄九郎「庄九郎」ハイく有がたう存じます、私は此家の番頭でござります、御用もござらばお心置なう「おまき」あまりと申せば爰は端近、チ、それく見苦しくとも奥の間へ暫くお越下さりませ、いざ御案内」とすよめられ、お耳「然らば暫時お茶の御馳走、外にお世話は必ず無用」と、おまきが案内に伴ひて、一間へ入れば庄九郎、庄九郎「御家來衆はこなたへ」と、皆打連れて勝手口、暖簾押上げ入りにけり。俄のお容に家内の騷、「ソレへお菓子煙草盆、豆腐取て來い八百屋へ走れ、此肴屋はなぜ遅い」と、喚きちらして庄九郎、臺所より出來り、庄九郎「扱忙しう成つてきたは、つ

いお茶漬ちやつけを上あげる、獻立こんだてせいといはれたが、ハア、何であらうぞ、マア向むかふが猪口ちやくに蒟蒻こんやくの白しろ齋あかい、そして汁じゆがばくち汁じゆ、平ひらは狗脊けんせいと油揚あぶらあげ、こりや念佛講ねんぶつこうの料理れいりぢや、こりや俺おれぢやいかぬ、最も一度魚屋いさやを呼びにやれよ」と、勝手口てりぐちから奥納戸おくなんど差覗さしのぞきく、小點頭こうだづきしてそろくくと戸だ棚だの前まへへ立ちかより、紙入しりいから相輪あひわづと見えて錠せうまへ手てばしかく、引出ひきだす財布さいふの縞しま黄金わうごん、五百兩ごひゃくりやうとは陸目りくめから、お弓ゆみが見るとも仕濟しすまし顔がほ、懐ふところへ握ねぢ込み押入れ、跡取膳あととりぜんふ折をりからに、何心なにこころなく娘むすめのお辻つじ、お辻つじ庄九郎しやうくわうそこにか、噺はな様さまがお呼びなさるよ」と、聞いて胸むねり狼狽ろうたへ眼まなこ、庄九郎しやうくわうイヤ庄九郎しやうくわうは一寸いっすんどこやら參まゐられました」お辻つじヲ、あの人の何なにいやるやら、其方そなたに料理れいりの事を云付いけると噺はな様さまが呼よんでござる」庄九郎しやうくわうム、そんなら何なににも見みやなされませぬか、ハア、まあ夫つまで落付おちいた、料理れいりの事ことなら八百屋やちやうと魚屋いさやにとつくりと云付いけたれば、氣遣きぢやうひはござりませぬ、いつ見てもくうつく美うつくし可愛かほい此腰こしこ付き、申し難つれな面なぞへく、お前の事を明あけても暮くれても暮くれても明あけても晝ひるは終ひま日夜ひまもすがら、お辻つじ様さまくエ、お辻つじ様さまくくと、重かさね戸棚とだを踏張ふんはるので、中山やまなかへ日歸ひかへりにした程足ほどに實じつがいり、其草臥くたびで寢ねた間まばつかり、夫つまより外そとに忘わすれる隙ひまはござりませぬ、名なを呼よんでさへ日本國にっぽんが一所いこへ寄よるやうななに、顔かほ見みて是こゝがたまる物ものか、コレ御覽ごらんじませ、天狗てんぐの面めんを風呂敷ふうろしきに包つだやうでどうもならぬ」と抱だき付けき、しなだるよ手てを挽ひぎ放はなし、お辻つじア、これく又またしても

あた猥らしい鬻らはしい、わしには歴きとした云號の殿御が有るぞや、あじやらも手合も事による、重ねて仕やると噂様にいふぞや」と、恥しめられても構はぬ厚皮、庄九郎「ム、云號々々と、いはしやりますが、其云號の男とはそりやマア誰でござります」も註「ハテ知れた事、京に隠れない藤屋の伊左衛門様」庄九郎「ハ、ハ、ハ、こりやをかしい、其伊左衛門殿は死なしやつたとの世間での噂、それをお前も能く知つて居てから。よし又伊左衛門殿が生きて居やしやるにもせよ、可愛さうに庄九郎が、思詰めて居る物を見捨てよ直に嫁入るは、大身代の伊左様と、榮耀がしたさぢや皆欲ぢやと、お前様を惡ういふぞへ、お主様を惡ういはしては、第一番頭の顔が汚れる、悪い事はいはぬ、わしがする様に成りなされ、こんなよい首尾又とない」と、厭がるお辻を抱きしめ、しなだれ廻る真中へ、いつの間にやら別家の手代助右衛門、も註「オ、よい所へようおぢやつた」と、悦ぶお辻、庄九郎は折角入つた居風呂の底のぬけたる如くなり。それと悟れど助右衛門わざと何氣のない顔付、助右「是はお辻さん庄九郎二人ながら爰に何してござります」と、いふ娘が涙聲、も註「コレ助右衛門聞いてたも、あの庄九郎が猥らしいわしをなぶりくつさる」と、いふを打消し、庄九郎「ア、申し、私や何にもいや致しませぬ、お前が芝居話をして聞かせと仰しやる故、三五郎と金作が色事を一寸仕形で話した計り、イヤそりやさうと助右衛門殿、こな

たは京へ登つたと聞いたがいつの間に戻らしやつた」助右「ホ、夕夜舟に戻つたが、それに付いてお家様にお目にかよりたい、どこにござるぞい」庄九郎「イヤお家様は奥にちや、用が有るなら呼んで来う」と、いふを此場の立込に、しほの目まぜと仕形にて、必ず何にもいふまいと、娘を宥め番頭は、奥の間にこそ入りにけり。跡はしらけて暫くは、挨拶もなき後の方、ホ、助右衛門戻りやつたか、大義で有つた」と母親は、庄九郎諸共奥より立出で、まき「さつきにから聲がした故早速逢うと思つたれど、今日は珍しい阿波の御家中、安松數馬様の奥方様、大阪御見物の序ながらお尋ねに預つて、御挨拶やらお伽やら久しぶりの屋敷付合」助右「夫は思ひも寄らぬ珍客、定めて何かお心遣ひ、まあ早速申しませうは、京都の様子藤屋の家の騒動、伊左衛門様の事は御病死とも、又生てござるとも取々の風聞にて慥な事は知れ申さず」と、聞いて娘も母親も、又今さらの憂思ひ、傍に差出る庄九郎、庄九郎「イヤ伊左衛門殿の事なら聞合すに及ばぬ、死なれたが本ともく、根元根本偽りなしの大誠、病死といふは皆嘘で、眞の事は阿波の殿の名を衒り、何か江戸の吉原で太夫を揚詰め、段々奢の戯が過ぎて十二月の饗應、夏雪降の體をしたとやらが江戸中の大評判、其ほくが阿波殿へかよつて、夫で伊左衛門殿は阿波の屋敷で成敗に遭れたを、一家衆が隠して病死にして仕廻うたとは、大阪中に誰知らぬ者がない、まあよい事はあのお辻

様をやらなんだが大きな仕合せ、此上は結納を戻してさつぱりと、他人に成つてお仕廻なされませ。繼がつて居たらどんな難儀が掛らうも知れぬ。お辻様は一人子の事なれば、内へ聳取つたがよござります。ア、どこぞ爰らに良聲がありさうな物ぢやが」と、己が勝手へ引きかけて云廻すとはしらぬ母、いか様是は庄九郎の云やる通り、世間の取沙汰も悪い伊左衛門殿、殊に生たとも死んだともしれぬ人に便々々と、繼がつて居やうより、結納を戻してさつぱりと、聳剪の縁切るが上「分別」と、母の詞に悲しむ娘、お辻そりや囃様何いはしやんす、常々お前の御意見に、女子は其身一生に、殿御は一人持つ物ぞ、夫と定る其人に、女郎妾の色狂ひ、腹の立つ事あらうとも、愠氣嫉妬の氣を持つな。随分夫を大切に、もしも不縁で去れても、又嫁入せぬ物と云はしやんしたをわしや忘れぬ。譬枕は交さずとも、云號すりや定まる殿御、其夫故どの様な難儀災難有るとても、娘故ぢやと諦て、必ずく夫婦の縁切てばし下さんすな。若し死なしやんしたが誠なら、わたしや此儘尼に成る、外の殿御は厭々」と、誠を守る娘氣に、母も兎角を涙ぐむ。助右衛門も目をしばたよき、助右、ヲ、御辻様ようおつしやりました、人の誠はこんな時が肝心、伊左衛門様の生死は噂計りで知れぬ事、一旦の云號を變改するは水臭いといふ物、彼方は至極深切に、此方の身代の不勝手なを察し、五百兩といふ結納の印、今云號を變改すり

や、まあ其金から戻さにやならぬ、差當つて是が迷惑めいわく」庄九郎「イヤこれ助右衛門、金事に拘かはつて家の爲にならぬ事しては、此番頭はんごうの顔が立たぬ。戻す金が惜をくば其金はおれが工面くめんして出す、金づくで娘御に難儀はかけぬ。サア此金を戻してさつぱりと縁切つて仕廻しほしやりませ」と、取出す以前の五百兩、庄九郎「我金出して主の力になる、何とこんな手代は有るまいが。家の爲なら命も惜まぬ、お爲く」と誠を見せ、娘を女房に跡式あとしきまでしてやるお爲ぞ恐おそしき、おまき「ホ、二人ながら家を思うての心遣、嬉しいといはうか過分くわぶんといはうか、取分けて庄九郎、五百兩といふ金才覺してたもつた段、一入嬉ひしほしい忝かたじけない。近年屋敷方の金は戻らず逼塞ひつせきの身分なれども、娘が一世一度の嫁入、其結納たのみに貰もらうた金、どの様な術じゆつない事が有ればとてめつたに遣うてよい物か。其時の封ふうの儘取つて置いたを見せませう」と、戸棚とだなの傍そばへ立寄りて、鑰取かぎとり出し錠押明じやうおしあけ、おまき「ヤア結納たのみに貰もらつた五百兩の金、爰こゝにはない」と恠おどろりを、聞て驚おどろく助右衛門、庄九郎も空とほけ、俱に立寄り上を下、尋ね捜さがせどあら金の、おまき「ム、錠前じやうぜんも損そこはず盗人の業わざとも見えす、若し置き違ちがはなされぬか。氣を静しづめてとつくりと、思ひ出して御覽ごらんじませ」と、娘も俱に氣を付くれれば、おまき「サア、いづれ金銀は大切の物なれど、わけて大事の此金とわしが部屋むまの此戸柵こざへ、置き忘れう様はなけれど、三度尋ねて人疑うたがへ、念の爲ぢや、藏の戸柵こざを尋ねて見やう」とふと立上る。

お弓「イヤ藏迄もなし其金は、やはりそこに」と聲かけて立出づる數馬が女房、庄九郎が尖聲、庄九郎「ム、藏へ行くに及ばぬ、其金がそこに有るとは、して五百兩の金は何處にござりますな」お弓「チ、外迄もなし、そちが出した五百兩が則ち戸棚に有つた金」庄九郎「何ぢや是が戸棚に有つたのぢや。コレ是はの、わしが在所へ云てやつて取寄せた五百兩、夫が戸棚に有つたとは、おんだら臭い馬鹿盡な」お弓「ム、在所といふそちが所は」庄九郎「チ、但馬の豊岡」お弓「シテ豊岡への道程は大阪から四十里餘り、日數にして幾日程に往て戻らるゝぞ」庄九郎「サレば急いで往ても行戻りでは八日程かゝらうか」お弓「ム、最前から様子を聞に、結納を戻さう戻すまいと評議の有つたは今日の事、夫に八口もかゝるそちが在所へどうして金を取りにやつた。エイ伊左衛門とやらの死なるゝ事を、そちや前どころからよう知つて、それで其金取り寄せたか。アノ横道者めが、サア盗んだ様子有やうに白狀せい」ときめ付けられ、ぎつちり詰れど怯まぬ悪者、庄九郎「ハテ變た所へ出しやばつて、變つた世話をやく女中、一體伊左衛門といふ奴はどら打ちのお大將、大坂へ來ては新町の夕霧といふ太夫になづみ、幾日もく居續の馬鹿者、そんな呆癡に大事の娘御を添しては、末が詰らぬと思つて、夫で疾から取寄せて置いた金ぢやが、夫が何とした人間ひとまへの悪い、盗人ぬすやの白狀せいのは、又わしが盗たといふには、何ぞ慥な證據でも有るか」お弓「チ

テ證據はそちが胸の内に、慥に覺えの有る盗人「庄九郎」ハ、こりやをかしいわい、わしが胸の中に有る證據、夫が爰へ出して貰ひたいな。かうなつてはわしも身晴ぢや、侍の女房ぢやとて遠慮はない、サどうすりや胸の證據が出る、仕様が悪いと赦さぬ」と、掴かゝる庄九郎が、小腕ぐつと片手に上上げ、懐探して紙入取出し、モヨ「ハレ助右衛門とやら、其内詮議」と投げやる紙入押開き見れば内には鍵一つ、合點が行かぬと戸棚の錠に合して見ればしつくり合鍵、モヨ「コレほんの鑰は此母が腰に放さぬそりや合鑰、ても横道な」と呆る主従、お弓は猶も手を振ち上げ、モヨ「主の難儀を救はん爲、主の金を盗んだれば忠義ともいふべけれども、此奴が心はさうでない、大枚の金を盗取り、儂が才覺した顔で、夫から付入り其お辻を女房にして、身代を丸取にせうといふ悪工する番頭殿、此内には置かれまい」と、庭へどつさり投付くれば、娘が悦び母親も、モヨ「飼犬に手を喰る恩知らずの横道者、隙くれる出てうせう」といはれて何と庄九郎、庄九郎「エ、あたぶの悪い失策てのけた、儂衛妻め覺えてけつかれよ、アイタタ、タア、いたいおさんは都の町で、待ちてをれよ」と口へらず、頬をしかめて出て行く。跡見送りて母は手をつき、モヨ「あなた様のおかけにて不時の難儀を過るゝ仕合、娘もちやつとお禮申しや」。モヨ「ほんにわたしとした事が最前から御挨拶も、お蔭で煩い病の根ぬけ、お勞休にナア嘯

様」さま「ままき」ヲ、それく、奥の間へお供して、無重寶むじゆうほうなそなたの琴ことでもお慰なぐさに」あや「夫は段
段心遣ひ、もうお暇いひごまと存すれど、左様ならば今暫し、御馳走ごちそうに預りませう」と座を立上り、娘
の手を取り、あや「驚き入たは此息女、貞女ていじよ兩夫に見えずの教をしへを守る心ざし、器量きりやうといひ貞心と
いひ、武士の妻にも有るまい育」と、子を譽ほめられて母親の、心いそく、あまき「コレ助右衛門、聲殿
へ戻す金元の所へ入れておきや」助右「そんならどうでも此金を」あまき「ハテ變改へんがひするも娘か可愛
さ、先様へ戻さにやならぬ大事の金、戸棚へ入れて奥の間へ、いざ御越し」と母娘こもな作なひ奥へ入りに
けり。跡に残つて助右衛門、金取納め煙草盆、煙管相手に獨言ひひとりごえ、「日比から義理を立て人を憐む母
御の氣質きしつ、夫に似合はぬ結納たひなみの印しるし、戻して變改へんがひせうと有るは義理も構はぬ御了簡ごりょうかん、又娘御の心は
きつい物ぢや、どんな難儀がかよつても、一旦いつたん定めた男なれば、外の男は持たぬとは、丁度忠臣
藏の小浪が様な心ぢやの。ア、どうで此云號いひたごけを、變改へんがひさよぬ仕様が有りさうな物ぢやが」と、心
一つにとつ置おきいつ、案じる此方こなた彼方あなたには、容饜應きやくくんでなしの琴の音、重扇かさねあふぎの風薫る、匂かぜひを傳つたふ薦たかづら、
忘れぬ人は今さらに、さらぬ別れのしやらどけも、やがて結むすばぬ岩出帶いわたおび、助右「アレついで弾ひかしや
る琴の歌でもとかく夫をしたふ唱歌しやうが、若し伊左衛門様の病死が本の事なら、いとしやあの子は
氣違きまがひになならしやるのである。ア、どうしてなりと夫婦にしてしんぜたい」と、思案小首かたがも傾かたき

し、日の目眩めまほき深編笠ふかあきかさ、浪人と思おほしくて尾羽おしほを枯からせし身の廻り、案内もなく打通り、浪人なみのり、
郎右衛門とは爰元な、在宿ざいしゆくならば御意得たい」と、聞いて居直る助右衛門、助右すけご「どなたかは存せ
ねど、成る程三郎右衛門宿は是でござれど、旦那儀は死去しきよ仕り則ち我等支配しほの手代、御用ござ
らば私に」と、慇懃いんきんにあしらへば、浪人なみのり、支配人しほにんと有らば亭主ていしゆ同然、赦ゆるしめされ」と上座に
坐すわり、浪人なみのり御意得たい事別儀でない、見らるゝ通り我等儀は尾羽おしほを枯からせし浪人者、知縁ちえんの者の
取持にて、播州のお大名へ召抱めしかへられ、近々出勤しゅつじん致す筈なれども、何を言いうても此風體かぜたい、身の廻
り何かの拵こしらへ、少々金子入用に付此家へ無心に参つたのさ、暫くの内取換へて呉くれられうなら、
過分にあらん」と押柄おしへいに、いへど此方こなたは律儀者りつぎもの、助右すけご夫は近比お氣きの毒どくな事ながら、只今も申
す通り、旦那相果て支配人しほにんの私、金銀の事は心に任せぬ事ながら、御浪人様の御出世の筋と有れ
ば、無下にならぬとも申されまい。マア其金は何程の事ことでござります」浪人なみのり「イヤ僅わずか五百兩、夫
程有らば當分夫で相濟む」と、いふに此方こなたはぎよつとして、助右すけご「申し五百兩とおつしやるは、
小判の事ことでございますか」浪人なみのり「成程小判五百兩、いはど少々いへの事、家柄いへがらを見かけて参つた、用立
ておくりやれ」と、いふを打けし、助右すけご「ア、申し、もう御意ごいなされますな、大概物たいていものには程の有る
物、御浪人の御無心ごみんよくくで有らうと察さつし、二歩ふたか三歩さんか高々一兩までなら私わたくしの了簡りょうけんでと、

思ひの外口にさへ頼張る金高、今逼塞の此粹屋、家内の諸色賣代なしても何として出来ぬ金、埒の明かぬ事に隙どらすと、又外々へ御出なされ」と、すつかりいへど動かぬ浪人、浪人「イヤサ外々へ参る所存なれば、押付て是へは参らぬ、家柄と云ひ金の有る事も存じて参つた。畢竟見すしらすの我等なれば銜とも思はれうが、高の知れた金の事、銜られたと思うて當分用違てくりやれさ」助右「イヤなりませぬ、銜られるも用立つも、金が有つての上の事、盗人銜の用心には無い程慥な事はない」浪人「すりやどう有つても」助右「ハテ七くどい無いと云ふのに」浪人「ハア是非に及ばぬ、此上はちとお座敷を穢し申す」と、居直つて肌くつろけ差添するりと抜放し、腹切る用意は強請の元頂、夫とはしらぬ正直者、助右「ア、申し、こりや何事をなされませう」浪人「イヤサ放しやれ、所詮無心を聞きとどけねば奉公の望も叶はぬ、此儘一生浪人せうより、切腹して相果る」助右「夫は御短氣まあく」と、とどむるこなたは、障子をひらき、お弓は何か繪圖取出し、引合す姿繪に、割符を合す浪人者、扱こそ是と心に笑み、さはらぬ體にて、「助右衛門く」と、呼れてはつとは云ひながら、爰も氣遣ひ立兼ねて、助右「イヤ申し御浪人様、必早まつて下さりませぬ、又了簡もござりませう」と、漸宥めて隔の襖開けばお弓が小聲に成り、お弓「一部始終残らず是にてきいたるが、あの浪人は阿波の十郎兵衛といふ海賊、昔の石川五右衛門にも

劣らぬ盜賊、夫故五右衛門の銀十郎と異名する由、仔細有て此如く繪圖を取て尋ね搜す、此度夫の上坂も殿よりの上意にて、彼を捕ん爲の事、今日計すも此弓が廻り逢うたも、數馬殿に手柄させいと天の賜、ハア、忝なや嬉しやく、家來にいひ付け召捕らん」と、勇立つを押とどめ、助右「成程左様な事なら疫病の神で敵とやらで、近頃氣味のよい事ながら、爰の内でお縛なされましたら掛り合に成つて、若し親方が難儀致す様な事は御座りますまいかな」と、氣遣ひがれば、助右「いか様なう、爰の内で召捕らば掛り合の筋は通れぬ。夫を庇うて依怙疊眞の沖汰もならず、銀十郎を召捕つたは斯様々々と明白に殿へ言上せにやならぬ。其時は掛り合、後家御を國へ召さるとは定の物、また其上に科人の口書次第でどんな難儀がかとらうやら、そこを思へば近比氣の毒、というて手に入つたあの十郎兵衛、見遁しては夫へ立たず、召捕つては此家の難儀、ハテどうしたらよからう」と、思案の體に助右衛門、助右「イヤモ左様な掛り合でお國へなど召れては、女の事なり難儀千萬、何とかう遊ばしませんか、如何なと欺してあの浪人を去します、所を御家來衆に言付けて門でお縛りなされませぬか、スリヤ私の親方にかけて構はないと申す者」助右「成程尤も、併し大抵の奴でなければ、自由に此家を去ぬまいぞや」助右「イヤモそりや致し様がござります、何で有らうとあの者が申す通り金貸ていなします。ハテ此家をさへ離た

れば、御家來衆がお縛しほりなされますか、そこでは金を此方へお戻しなされて下さるれば、難儀なんぎも掛らず濟むといふ物」お弓、ム、でかした道みち上のぼり分別ぶんべつ、然らば其旨そのじは申付けんと、家來を密ひそかに小手招まねき、お弓「汝等は裏道より表へ廻り、コリヤかうく」と叫こゝろき黙もくく相圖あひづの手配てくばり、助右衛門は何氣なく勝手へ出て、助右すけゑ申し御浪人様迷惑めいわく千萬まんな御無心ごむしん、私の心では濟ぬ故、女儀ながら親方に相談致したれば、お侍様の命いのちに代かへての事無下むげにいやともいはれまい、よい様に計はからへと有る故、仰の通り五百兩御用立ませう程に、御出世ごしゅっせ次第あひだ御返濟ごへんせい下されませうか」と、いふにこなたも刃物を納め、浪人然らば拙者が望の通り聞き届とどけて下されうか、是はく過分くわぶん至極しごく浪人ハテお命に及ぶ事、手前も逼迫ひつぱく難儀なれどお取りかへ申します」と、戸棚開いて以前の金、包つみながらの五百兩渡せば取おして押戴おしだき、浪人拙者が命助る恩義おんぎ、生々しんぞう世々忘わすれは置かぬ、心もせけば早いお暇いさま」左様ならばござりませうか「お禮れいは重ねて」「さらばく」と金追取つて懐中くわいちゆうへ、表おもてをさして立出づる。待設まちまうけたるお弓が家來、家來「こりや捕とらたは」と左右より、寄よるを蹴倒けたしもんどり打たす、手練くせものの曲者持餘もてあます、家來が働見兼ぬるお弓、小褌こぶまを帯おびにしつかりと、挾箱はさみかこより用意の捕繩とりなは、表へそつと竊うかどひ足あし、お弓「阿波の十郎兵衛遁のがさぬ」と、夕日も西へ入身いりみの備そなへ、「イヤちよこ才さいな」とほぐしの柔術やばら、互たがひに裏取表口うらどりおもてぐち、助右衛門があぶくと心を配くばる氣を配る、お弓をてうど眞しんのあて、

逆行く曲者遁さじと、たちろく足を踏しめく、跡をしたうて行く道は、大川筋の濱傳、かけくる浪人追ひくるお弓、人なき所に立ちどまり、も「こちの人」十郎、女房ども、まんまと首尾好う出かしたく。五百兩といふ仕事、思ひの外心安う手に入つて有難いと、財布取出し戴く後へ、いつの間にやら庄九郎、庄九、ヤア様子は聞いた銜妻め、よう先にはえらいめに遭したな。銜どもを引きくより代官所へ引いて行く、覺悟しをれ」といはせも立てず引抜いて大袈裟切り、どつさり響く暮六つの、かね懐へ夫婦連、行方しらず三鼠なりにけり。

第五

坊主「南無阿彌陀く、抑當寺の御本尊目剝の如來と申し奉るは、人皇廿六代武烈天皇惡逆無道の王様にて渡せ給ふ、其時に此如來出現ましく御怒り給ひ、兩眼を剝せ給へば、武烈天皇眼をまはし給ひしより目剝如來と號し奉る。かよる尊き御佛なれば、此攝州寺町尊正寺に安置し給ふ。一度拜する輩は、惡事災難を免かれ、時花病取つく事あたはずまた盜賊が這入らんとすれば、睨み殺し給ふ靈驗あらたなる尊像でござる。此度序に御開帳はござれども、又御開帳は稀なる御事でござる。信を取つて拜を有られませう。此刀は三條小鍛冶が打つたる名劍、義經公

よりの御寄附でござる、得と拜なされい。追付け開帳に間もなければ、賽錢を上げて御縁を結ばれませう」と、縁起坊主の口車、老若男女押合ひ舂合ひ、奇瑞も取々聞傳へ、お百度参りの數取りや投ける散錢ばらくく、早閉帳の鉦の音、戸帳も下る七ツ過ぎ、思ひく願籠めて、皆散散に立歸る。二人の弟子はほつと顔、鈍才坊「ナント才覺坊、此間は無上やたらに夥しい參詣、此如來の奇瑞には、根性の悪い者は、眼を剥いて睨ましやるの、お請けが有ると座頭の眼が明いた、膝行が立つたのと、世上で專の取沙汰、そこで我等が出鱈目の縁起、何と味やつたで有らうがな」才覺坊、いかにも貴僧の云やる通り、今迄何の役に立たぬ如來ぢやと思つて居たは、こちらが根性の悪いの、是迄貧乏な此寺、和尚も俄に福僧になられて、今夜彼のお梵妻が見える筈、此様に賽錢の上る時にしこだめて、買梵妻で樂まうちや有るまいか「鈍才坊」コリヤよからう」とそより立ち、天窓擲いて悦ぶ所へ、奥より和尚立出でて、和尚「コリヤ才覺坊鈍才坊、もう日も暮かよるに何をのらくら、賽錢集めて仕舞はぬか」と、呵られてとつばかは、賽錢箱を打明けて、手ん手につなぐ數珠の實の、數は八貫蓮葉に、浮む小玉や包銀、一つに集めて、和尚「ホ、昨日よりは銀納が多い、モウ日も暮るれば彼者が来るで有らう。鈍才は爰掃出し、火を點せ。才覺坊は此錢銀、納戸の内へ運んでたも」と、打連れてこそ入りにける。既に其日も黄昏や、

身の置所なき花の、べつたりとした厚化粧、人喰た様な口紅粉で、びらりしやらりの冬瓜顔、付添ひ来る淨慶は、門内窺ひ訪なへば、和尚は待受け出で向ふ。淨慶「コレく和尚様、約束の彼梵州、只今同道致しました」和尚「それは近頃御苦勞千萬、先々はへ」の挨拶に、伴ひ座敷に押直り、淨慶「扱て昨日何角お咄し申した通り、是から隣分可愛がつて下さりませへ」和尚「成程成程、衣の振合も他生の縁、可愛がらいで何とませう。貴僧何角とアいかい御世話でござる。コリヤ鈍才、ソレ盃を持て来よ」と、和尚の目遣ひ、取看、銚子盃持出づれば、「是はく御丁寧、然らば先仲人役差圖致さう。コレ正貞様、何ほ天窓は丸うてもお定り、サア呑んで差さんせ」正貞「そんならお慮外、ホ、ホ、ホ」と、盃を取上ぐれば、「お酌仕らう」と三獻合せつきかくれば、すつと香干し、正貞「此盃はどうせうへ」淨慶「ハテしれた事葬禮迄のお梵妻、其盃は和尚様へ」正貞「ホ、ホ、ホ、是は近頃お慮もじ、是から萬事御世話がち、兎角御念もじになされて」と、お極りなる口上に、和尚はやく打笑ひ、盃取上げ押戴き、和尚「世話は互に此方からも頼みます」と、是も三獻受持つて、誂一ツ鳴尾の沖過ぎて早住の江に著きにけりと祝儀の小謠、淨慶「是で固めは相濟んだ、仲人役の我等は茶碗」と、手酌に引受けがぶくく、肴は酢鮓か、祝儀を祝うて酢鮓とは、コリヤ出来た」と、鉢をかよへて無息呑、正貞「ア、目出たしく、ナア和尚様」和尚「ア

イヤもうかう解合うからは、云つて置かねばならぬ、拙僧が寺號は尊正寺、替名は正清と云ふ程に、よう覺えて居たが能いぞや」正真「アイく、そんならお前のかへ名は正清様、いかにも正の字は正しく、清は清いといふ證據」和尚「そもじの名は」正「アイ正貞と申します。正は正しい、貞は貞女の貞の字でござんす。おまへの名は正清様」和尚「そもじは正貞、ハテ思ひ合つた名ぢやなう」と、坊主天窓をかち合せ抱付いたる有様は、蔓をからみて出来もよき、西瓜を見るが如くなり。淨賢「ヲ、先々御氣に入つて大悅致す、仲人は宵の程、最早お暇申ませう」と、淨慶は庭に下り、ひよろりく立歸る、和尚「サナく、餘程夜が更けた、あすはとうから起きねばならぬ、門をしめて火の用心、正貞おぢや」と手を引いて、和尚は一間へ入りにけり。跡に鈍才才覺坊、浦山しけにながめやり、鈍才「ひよんな氣になつた、夜が更けたらば抜けそもならぬ才覺坊」才覺「ヲ、おれも體がしやきばつて來た、虫養ひに抱かれて寢ようか」鈍才「ヲ、抱かれて寢るけれど、此方も愚僧も同じ身の上、エ、こんな事知つたらば、去年落した前髪が、どちらに有つてもよいものを、ア、任せぬが世のならひ、サアく、寢よう」と、帯解ひろけ抱き付き、寢るより早き高軒、早更け渡る夜嵐に、水も寢入りし丑滿頃、皆一樣の忍び頭巾、先に進むは闇の黒八、ばつたり道七、跡に控へし大男、大だら腰に名も高き阿波十郎兵衛、夜盜の一族叫き點

頭き、黒八道七腰の段平引き抜いて、手練の早業數垣一重、音もなんなく切り破り、一人はそつと忍び入り、内を窺ふ門の戸を、開けば十郎兵衛しづくと、指圖に隨ひ兩人は、指足拔足納戸の内へ忍び入り、銀箱かますを引抱へ、出るに和尚は眼を覺し、「ヤレ盗人よ」といふ聲に、二人の弟子は飛上り、わつと裸で胸ふるひ、黒八道七睨付け、「ヤアあた噺しい、おどほね立てると儕等が爲に成らぬぞ、押黙つてけつかれ」と、つかふど聲に和尚もわなく、爰ぞ大事と胸をすゑ、和尚「ヤイ命しらすの盗人めら、此寺へ盗みに這入といふは、儕等が大きな不覺、爰を何所ぢやと思ふ、コリヤ、爰は寺町尊正寺ぢやぞよ。忝くも本尊は奇瑞の有る目割の如來、諸人群集をなすをしらぬか。儕等が様な盗人共が這入り錢銀を盗んで往かうとするを、アノ如來様がお目玉を剥かしやると忽ち其體がひりくく、ぐにやくくと碎けて死ぬるぞよ。そんなめに合はぬ中に、盗んだ物を置いて、詫言をして早う去に居らう」盗人「ヤイヤ、エ喧しいわい、アノぬかした面はいなう、おいらが手に入つた物を返すといふは、ア、如來が撥鬢奴に成つて、泥龜屋をする時節に返してこまさう」和尚「ヤ、こいつがく、生如來様を勿體ない事いっただぞよ。よいく、コリヤく、兩僧、此上は如來様のお力を借らねばならぬ、わいらも俱に祈れく」「いかに合點と裸身に、手巾鉢卷すたく坊、和尚と俱に數珠さら

さらと押しもんで、三僧さんそう抑おさ我朝わがくにに尊たつとき佛ぶつは多おほけれど、中なにもこちの目め剝はき様さま、一いに意い地の悪あくい奴やつ、二にに睨にらみ、三にに三々さんさんなめに合あはせ、四にに死しぬる程ほどな苦くるしみかけ、五にに五體ごたいをしやきばらし、六ツツ夢中むちゆうにならば七ツツ泣ないてもわめいても、八ツツ役やくには立たたぬ事こと、九ツツ爰あな大だい盗とう人を十でで頼た死しをさせてたべ。南無なんぶ眼め剝はきの如ごとく様さまと責せめかけ、祈いのりけり。時に不思議ふしぎな雲うみおこらず、奇瑞きずねも更さらに有あらばこそ、和尙わじやうも弟子でしも手て持ぢなく、うつとりとして居ゐたりける。十郎じゅうらう兵衛べいゑ高たか笑わらひ、十郎じゅうらう願ねがふが利りと云いうて、此こ寺てらへ錢銀せんぎんを上げさすのは、皆みなおれが仕業しご、根ねを尋たねねばおれが物もので、おれが取りに來きたが誤あやりか」和尙わじやう「ヤア、扱とは此方こちの如ごとく來きを時花ときはなすやうにして、錢銀せんぎんを上げさせ、其銀ぎんを取りに來きるのぢや。コリヤ壺つぼぢや、ドレそんなら報謝ほうしゃに少すこしばかり」と、取付とく腕首うでくび引ひつかみ、「ヲ、報謝ほうしゃには丸裸まるはだか」と、和尙わじやうの著物しやくぶつ剝はき取とれば、「是こは胴欲どうよくお赦ゆるし」と、二人ふたりの弟子でしが取付とくを、引ひつまんで打付うちければ、黒八道くろはちだう七しち俱ぐ々に踏ふみ付つけ、十郎じゅうらう「ヲ、もう能あたいはく、赦ゆるしてこませ。したが、寶物ほうぶつの此刀ここの、心當しんちやうの代物しろもの」と、引拔ひいてとくと改あらめ、「エ、何なにの役やくに立たぬ生なまくら物もの、何なにぢやきらくとした此打數このうちかず、是こも一いっ緒しょに盗ぬんでやる。又また賽錢さいせんが蓄たまつたら取りに來きる、必かならずに盜ぬまれなよ。アノ大だい盜とう人ひとめ」と十郎じゅうらう兵衛べいゑ、手て下したに諸色しよしき取と持ぢせ、悠々いゆうくとこそ立たか

へる。斯くと見るより正貞は、庭の隅より走出で、裸和尚に縋付き、正貞「さつきにから怖さに味憎部屋へ隠れてゐるが、此お姿は何事ぞ。今夜漸此寺へ入佛して、いとし可愛と肌ふれた、其温暖を冷したは、あの盗人の胴欲や。思へばく和尚様、目剣の如來で銀儲、銀澤山な此寺へ、來ると其儘盗人に、遭ふと云ふのはあたすかん、よくくなすびな生れ性、夫が悲しいく」と、身欲を思ひ詫泣き、正味の涙交りなし。和尚「チ、悲いは道理々々、是に付けても聞えぬは、日頃飼つて置くアノ如來殿、盗人と一味して、ようきついに合したなう。此評判が廻つたら、明日から参りは一人もなし、コリヤまあどうせう才覺坊「才覺坊」ア、成程、御悔は御尤、いつまで泣いても歸らぬ事、明日から鼻の下を養ふ思案が肝心、鈍才何と思やるぞ」才覺坊「サアレバおれもそれが心がかかり、ア、どうしたらよからう」と、思案とりくくさまぐくに、四人は胸を痛めける。中にも和尚涙をとどめ、和尚「ム、よい分別が出たぞく、二人共に聞いてくれ、かよる災難にあふ不仕合、明日から参りも有るまいし、無いと乾上る四人が鼻の下の養ひ様は、幸ひ普請の時の地車に、アノ如來を乗せ、町々へ勸化に出る思案はどうぢや」弟子「シタリ、如何様寺に置いて役に立たぬアノ如來、酷いめに合せ過怠、コリヤよからうと二人の弟子、勝手へ立つて引出し、住寺も俱に地車へ、乗せる如來に恨言、和尚「如何に知らぬが佛ぢやとて、あんまり

酷い胸欲ぢや、毎朝此方が喰はぬ先に、初穂を上げるは何の爲、こんなめに合はぬ様と、大事にした甲斐もない。去とは酷いのら如來、思ひ廻せば廻す程、腹が立つて身が燃ゆる。今夜始て枕かはせし、正貞の手前さへ面目もないわいの」と又取り亂すしやくり泣き。テ、お道理と泣きたさを、泣かぬ鈍才覺坊、弟子「アレくとやかういふ内に夜明烏のかしましや。サアく出よう」と進められ、進まぬ和尚も裸身に、衣手々に二人の弟子。跡に正貞袋持ち、才覺鈍才聲張り上げ、弟子「横寺町尊正寺眼剝如來直の勸化盜人に合うて尊正寺」和尚はつちと口々に、衣の奉加口奉加、打連れてこそ 三重。

第 六

とんくくく、とんと世上の、色の湊は京の女郎に江戸の意氣張、大坂の揚屋で長崎衣装著せて、一ふう三四五六に七八九軒町、師走の果も色里は、別世界なる賑ひに、胸の煤掃衣装著せ、紋日の日和吉田屋の、庭は餅搗手鞠つく、春より先に春めけり。太四郎「節季候、だいくくく」喜八「是は忙しない、今やうくと搗かける所へ、もう催促か、五六軒行廻つておぢや、あんまり早い」と顔見合せ、喜八「ヤア太四郎様、こりや珍らしい、何の間にトの字へお這入」太四郎「ハテ喜八田舎

者、貴様はかご兒、俺は太鼓持、貴様や俺は、旦那衆をせぶつて喰う節季候と同じ身ぶん」喜八「こいつはゑい、お澤どん、お上へ申上げさんせ」イヤ聞て居る」と伊左衛門、伊五、太四郎喜八、隙がるると思つたが、龍宮の踊の拵へ、此浦島を待たせて置いて、乙姫はどこにゐる」太四郎「染之丞どうぢや」染之丞「イエ太夫さんは、癩で頭がふらつくとして、私を先へ」太四郎「コレハしたり、そんなれば此子も此子、附まして居たが好いわいの、手鞠ばかりついてゐると、最一走呼びましておぢや。コレくこれいなう、ヲ、聾」アイ、夫でも手鞠がわしや面白い」とんくく走り行く。太四郎「イヤ又夕霧様もきついきしましやう、旦那江戸へお出なされ、半年もお通ひなかつたに、此頃久しぶりのお歸り、磁石の様にひつ付いて、ござりさうな所、扱は葎原でのお樂しみを、少しひざりの筋と見える」喜八「イエさうぢやないぞへ、住吉屋の阿波のお客、身請の噂で起つた癩、どうぞ伊州様の方へ、ちやつと身受さしましたいと、こちらの旦那様が氣をせいで、京の藤屋の手代衆に逢うて、金の降り乗りして來ると、それで一昨日京上り」伊左「何ぢや、喜左衛門はおれに隠して本家へ行たか、氣轉は利いたが、親共は悪い癖で女郎が嫌ひ、失策つて戻らにやよいが」喜八「ア、旦那、そんな先折おつしやるな、大事の祝儀日、神様へ早うお鏡備へまし、二人中もまん丸に、重り合うてござる様に」太四郎「エ、喜八下手ぢや、是から太四

郎が一日參らう、白取は唄の役、お澤どん、お徳どん、二人を假の本妻妾、旦那囃して貰ひましょ。伊左「コリヤくくく、此方の唄らやお妾や色めが、紅の襟をしんどろもんどろかけて、しんどろりと、磨ぎやりましたを搦こなら今ぢや」太四郎「旦那は金持、太夫は癩持、我等は筆頭持、喜八は荷持、中居は懷妊か、お澤が尻餅、悪戯さんすなお徳がやきもち、送りの長持、もち込み取込む吉慶吉田や、さらば是からせんざいらく、まんざいらく」と舌鼓、打連れ奥へ騒ぎ行く。苦界の中の樂しみは、勤めと色と二ツ葉の、音に聞えし全盛と、名に夕霧の立姿、雲の黛筆にさへ、誰書きなさん越後町、しどけ媚く襦袢の、跡に身代破れ編笠、紙子の燧朝夕の、煙も其日の貰喰、物貰「お情に預りませう太夫様、申し太夫様」と、付いて廓の揚や町、鑼人が見付けて走付き、鑼人「テモ扱も此乞食殿は、伊勢參りの道か何ぞの様に、太夫様の傍へ汚い裝で、悉皆花畑の鳥おどし、見なりの悪い、退いて貰を」とつかふどに、夕霧つくくく打守り、夕霧「コレなう、はしたなう叱らぬがよい、心有けな物貰ひ、紙子姿は粹の果、昔はどんなお方やら、おいとしほや」と美しい、詞に取付き、物貰「さすが名にしおふ太夫様、お見立の通り其以前は、分相應の花もやつて參りました、かうした風體のものを結構な御挨拶、あんまり有難うて、物貰ひます所ぢやない、何とお禮の申し様も此身分、さもしい物ぢやが私の志、どうぞお

受け下さりませ」と、貰ひ溜めの錢一文、破れ扇に差出せば、健人「ヲ、汚な、太夫様ありや氣違ぢや、相手にならずと、サアお出で」と、いへど諾へず錢取上げ、夕霧「縺子縮緬が戀はせず、身には襦袢をかけうとも、心に錦が著たいとは、昔の粹な女郎衆の詞、御念もじのお禮忝う存じます」物真「そんならお受けなされて下さりますか、エ、有難い」。其お情にあまへて、申出すも、近頃お恥かしい事ながら、太夫様、私はお前に惚れました。もうく惚れたといふ段ではない、忘れもせぬ跡の月の廿日の朝、時分柄物参りも少なし、氣の大きい色町へ行たら、手の中も多かるかと、九軒の方へ來たが因果、夕霧様の道中、ふつと眼にかよつてから、テモ美しい、こんな物を抱いて寐る人も有るにと思ふと、錢貰ふ事も喰ふ事もとんと忘れて、毎日、外へは行かずに、此廓の中ばかり、お前の姿見る度に、あんまり減相な事ぢやと思つて見ても、どうもく忘れられず、つがすほうの上に戀煩ひで、糸より細く瘦れたと小歌の通り、此通りなら、どうで死んでござりませよ、不便なやつぢやと思し召し、どうぞ御報酬にたつた一夜さ、抱かれて寝てくださりませ、お慈悲ぢや、お情く」と、手をする涙編笠の、辻にひれ伏し泣きるたる。さすが名取の夕霧太夫、夕霧「扱もく深切なお方、勤の身でもそれ程に、眞實惚れたといはるよは、誓文嬉しい忝い、聞届ましたぞへ」物真「スリヤ叶へて下さりますか」

夕霧「サイナ、お志と女郎の意氣地、立ちながらでは話しも成るまい、サアまあこちへ」と吉田屋の、内へ手を引き連れて入る。すぎが悔り興醒顔、衫、コレ太夫様、其乞食を、お前は色にする氣かな」「イヤ色ぢやない、高うても低うても、お客様に買はれるは勤の習ひ、此方のお錢一つは、世に有る人の千萬兩、それで夕霧が買はれたわいの」衫、エ、あの錢一文で賣るのかへ、お前それでも、揚のお客が有るぞへ」夕霧「ハテ貸借は女郎の儘、したが其姿では宿の思はく、コレ染之丞、幸ひ伊州さんの替衣装、召換へさせて連れましておぢや、わしや奥へ行て居るぞや」「アイ」と禿が長持の、夜具に添へたる大盡小袖、著かへさすがの鑑人は呆れ、「いかに羽利の女郎さんぢやてよ、物好も好い加減、太夫様を乞食に借すとは、犬に伽羅嗅す様な詮索、揚のお客へ知れぬ先に、早う戻して貰ひましょぞや。コレ夕霧さんの禿衆、染之丞く、錢一文の太夫さん呼びましょ、やあ」とわめいてぴんしやん出でてゆく。とかくする間に取繕ふ、破れ紙子は時の間に、たちまちかはる粹模様、髪撫付けつ撫でさすられ、物貰ひは夢見た心地、有難過ぎて身はがちく。太四郎喜八飛んで出で、太四郎「やつちやお出で、初對面の判官様、北か南か粹と見た眼は違はぬ」と、そやし立てられ冷汗ながら、「ヲ、南ともく、所は長町、イヤ南堺筋九丁目」喜八「へエそれがあなたの御本家かい」物貰「ヲ、く、本卦常卦うらやさんの筋向

ひ「太四郎」ハ、ソリやお下屋敷で有る、頭からお駟は、もつとてうでござりましょ」物真「サア其お長とは我等相住」太四郎「したり、あなたのお妾を、お長様と申しますか」物真「サア夫はおれに好う懐いて、戻ると尾を振つて手をくれる、蒲團の替りに抱て寝ると、温うてよい物ぢやが、時々足を嘗ぶるには困るてや」「エ、いやらしいお契ぢやな、さうした色様有りながら、此廓へお出かけは、洒落木の金毘羅大盡様、先づお通り」と、そより立て、足元にころり、太四郎「コリヤ何ぢや、うそ穢い米袋、乞食が爰へ來う様はないが、捨てて仕まへ」と門の口、物真「ア、勿體ない大事の物、一握りを大體では呉れぬぞい」太四郎「コリヤきつい、客いと見せる悪洒落は、是もちよほくりちよんがれかい」物真「ヤア貴様も此方の町から出たか、よつ程下地があるはいの」と、素性顯はず歩きぶり。されども此人夜はくれども晝見えす、どうやらしゆんだ諺ぢやと、思へど知らぬ牽頭持、且那上ぢやと付いて行く。素振見付けた伊左衛門、一人小腹の立ちつ居つ、伊左「生傾城の四つ足め、乞食にさへ惚れるからは、選嫌ひなしの助兵衛女郎、欺されたが悔しい。あれなら身請の仕人さへ有れば、何所へでもうせるで有る、引ずり出して踏うか、夫もあんまり野暮ぢや、どうぞ粹らしい頬打の仕様が、有りさうなものぢやが」と、恪氣の仕様に手を組んで、工夫の半お澤が走て、選「申し、新住の阿波のお侍様、お前様に逢

うとて、氣相變て見えたわいな。おなじか逢はせましとむない、それで一寸知らします」と、いひ捨て出れば、伊左「何の侍、怖い事微塵もない、逢うてこまそ」と強い事、云うては見たが、伊左「侍客、慥に意地悪の郡兵衛め、追放の身の伊左衛門、コリヤ逢はれぬく」隠れう所も、伊左「何のその、夕霧が色の根を持つ郡兵衛、いつその事せりふせうか、イヤさうしては、どうせうな、太夫めが性根も見たし、破るは易し隠れて見ん」と、短い心を長持の、底に納めて忍び居る。上の女が詫るも聞かず、郡兵衛が高呼はり、郡兵衛伊左衛門の大ずりめ、三ヶの津お構ひの身を持つて、大阪の廓通ひ、夕霧が蟲に成つて、立つ氣立洒落臭い、爰へ引出せ仕様が有る」家人「どの様に仰やつても、伊左衛門様は爰には」郡兵衛「イヤサ隠すと汝等が爲にならぬ。よいよい、家搜して國元へ引きすつて行く。案内せい」と、そこから傍睨廻して入るあとへ、亭主吉田屋喜左衛門、船上りの合羽がけ、喜左「太四郎喜八來て居るか」太四郎「ヲ、喜左衛門様、待つて居るく。京の首尾はどうぢや、かね請取てお歸りか。今も今、阿波の客が僻起して、伊左衛門様に直に逢はうと、一遍三階迄家さがしすれど、面妖な伊左様が、いつの間に何所へやら、とんと姿が見えませぬ。マア早う金の顔が見たい」と、氣おひかよつて尋れば、喜左「なんぢや伊左衛門様が見えぬか、そりやこそな、ア、南無阿彌陀く」太四郎「ア、忌々しい何ぢやぞいの、

まあ伊左様に逢はしたい、お澤殿最一度尋て」喜左「コリヤ、もう尋ぬるに及ばぬ、伊左様は死にやつた。サ、違ひなし正眞事ぢや、藤屋の名家へ尋ねていて、様子を聞けば伊左衛門様は、此夏江戸の店で死なしやつた、しかも大名の名を銜たほくで、成敗に合しやつたと、早速店からいうて来て、とうに體見の葬禮、今日石塔を立る日ぢやと、坊様が經やら百万遍やら、始めて會た御隠居が、私捉まへて泣かつしやる。コレ戒名も書て貰うて来た、好色院粹客美男信士、たつた今迄姿の見えたは、夕霧様に心が残つて、逢ひにござつた幽靈に極つた、悲しや跡の月からの揚代雑用、香奠になつたはいの。南無阿彌陀く」喜左「ハアしまうた。かたみこそ今は仇なれこの紙花、此正月に牽頭持のかた三日、買つて呉るお客は有るまい。肩もしれた」と駕籠舁の、杖に離れし涙なり。郡兵「伊左衛門め爰にをるか、うせい〜」と引立て出で、郡兵「郡兵衛が戀の妨する、生白けた此しやつ頬」と、鬢引上げ、郡兵「ヤアこりや違うた、ハテ面妖な」とつき放せば、喜左「ア、申し、伊左衛門様は死なしやつたもの、何の私が所にござらう」郡兵「イヤサ、夕霧を揚詰の客は、慥に伊左衛門と聞いて来たはい」「イヤ申し、いかにも伊左衛門と申すは私、サア同じ名は何ほもありうち、夕霧を買うたも私、お前様と近付でなければ、意趣請ける覺えもなし、何で斯様に打擲はなされます」郡兵「ソリヤ人違へさ」「ム、

二腰も差いたお人が、理不盡に客の座敷へふん込むさへ有るに、なぜ此様に打たつしやつた。お侍様、こりや御龜相でござりますな」郡兵「ヲ、サ、まあ僂相のやうなものさ」「御僂相なればまつかう」と、足首取て突倒せば、郡兵「うぬ慮外やつ、何ひろぐ」「サア是も僂相でござります」「イヤ推參」と抜きかよるを、喜左「マア御堪忍」と喜左衛門、止める顔して突飛ばせば、牽頭が詫言、「もう御了簡拜みまする」というては抓り、「御尤」では踏みこかす、尤もごかしに身はひろく、臍抜になつて、郡兵「ヤイ亭主、あいつ打放す奴なれども、そち達か詫るが不便さ、助けて歸る」喜左「エ、有難うござります」郡兵「併ながら思へばあいつ」喜左「ア、もうよござります」「喧嘩はさらりと住吉屋で酒にせう、お身の痛に瓢箪町で、瓢箪酒もよござんしよ。チャンチキチ、タホ、、、チャンチキくくく」チン、瓢箪「ぢやく」と、お留守になつた留守居の腰、押立てこそは出てゆく。胸の晴間を夕霧は、禿に銚子盃持たせ、夕鬘「手の悪い、どこへはづしてぞ。末長う固めの盃、一つお上り遊ばせ」と、客あしらひの嬉しさ術なさ、心は何にたとう紙、伽羅の薫に咽返る、悋氣の煙、淺間山、藤屋はそつと長持の、二人が有様見るとも知らず、物賈「此様な思ひがけもない、有難い事はござりませぬ。コリヤまあほんくにお前様を、抱て寢るのでござりますか」夕鬘「サレバイナ、お前の望聞入れた其代りに、又わたしが願ひが有る」

物真「イヤモ何なりと承りましょ」。「サア願ひといふはナ、わたしを抱て寢ずに抱て寢て下さんせ。ナ、かういへば黓るとも思うてど有らうが、神様懸けてさうぢやない、藤屋の伊左衛門様とは、ついした中ぢやないわいな、誓紙より堅い互の心、任せぬは勤の身、此間外へ身受の約束、伊州様も部屋住の、急に才覺出来ぬ中、若し外へ定まつたら、此夕霧は生きては居ぬ、夫程心底立る身で、お前に抱れて寢ようというたは、貧しいお方の志を立てるも一つ、眞實はお前様と寢たといはど、袖乞に肌ふれた女郎と、廓でばつと噂になり、客の落ちるがわしや樂み、身請の沙汰もやむ道理、此方から頼んでどうぞして、惚て貰ひたい所を、よう惚て下さんした。此上の御無心には、盃計りで了簡して、逢はずと逢うた分にして、面向計りの色になつて下さんせ。エ、夕霧が命一つ助るはお前の心、一生恩に著ませう」と、乞食を拜む兩の手に、落ちて流の涙なる。つくづく聞いて顔ふり上げ、物真「太夫殿、必ず其詞を違へず、伊左衛門様の事を、一生見捨て下さるなや」夕霧「エ、さう言はしやんすりや、お前の心も」いかにも、誰も聞いて居はせぬか」と、見廻す後の長持に、「ヤア伊左衛門様か」「助右衛門か」はつと恠り蓋びつしやり、助右「コレ申し、隠れさしやます事はない、伊左衛門様の事に付いては、夕霧殿に恨も有る、一通り、わしは今橋の粹屋の手代、親方の娘お辻様は、藤屋へ嫁入さつしやる筈、親御同士の言

約束、結納の金子五百兩を、盜賊に衒られたは、此助右衛門が一人のあやまり、藤屋への言譯に、わしがでに勘當受けて、其舉句に大病やみ、少々の小道具賣喰、とうく長町の裏屋住居、途中で伊左衛門様のお目にかゝり、江戸のしだらのお咄し、京の本家へは、立寄る事もならぬと哀なお姿、いはゞ親方の聲様、おれが爲にも旦那殿、マアくくと内へお供して、術ない世帯を知らしたら、氣兼ねさるよも氣の毒と、随分貧乏を隠して居れば、コレ助右衛門、おれが大坂へ来たは、夕霧に逢ひたさなれど、此寒い装で廓へは行けぬ、衣装の才覺頼むと有る。お辻様の事をあれ程に思はしやるならと、小腹は立てど、ア、しどのないがよい衆ぢやと、古手屋を詮議して、損料借も一夜さかと、思へば幾夜さもく。適内にとごると、本見るとて、小買の油に燈心を、十筋も入れて夜明し、晝になると氣が重い、食が味ないと言はつしやるも無理ではない、諺うたひの寄米を喰ひながら、高砂屋の羊羹をとてこいの、其間にはとつけもない、金四五十兩借て呉れいのと、つまんだ様に言はつしやる。廓の贅に入るかね、お辻様の仇になる夕霧殿、とはいへ誠の心底なら、大妻妾もあるならひ、欲でするのか眞實か、こな様の性根を、試して見る乞食の色事、紙子姿に情をかける、驚入つた女郎の意氣地、なづましやつたも無理ぢやない。いふは管ぢやが、最前のわしが姿の通り、紙子著た伊左衛門様と、随分添とけ、其

上でお辻様の身の上も、見捨てぬ様に頼みます。おほこな娘の一筋に、あなたをこがれて、秋の頃よりぶらくと、今に煩うてござるけな、それ程に思詰めさつしやつた、心根がいとしさ、袖乞の中で、茶屋遣ひの仕送りするも、矢張お辻様へする奉公、かいの廻らぬせん詰り、鼻を伏見の泥町へ身賣、三つになる坊主めが、乳に離れてぐしくと、泣寝入に寝る顔、見れば浮世の義理と、諦めても、ほろ／＼涙がこほれます」と、歎けは道理と夕霧も、「お辻様に義理立てて、思切らうと思ふ程、どうも切られぬ、こらへて」と、同じ思をかき口説く、心のたけは塵紙と、のべの幾重を染めにけり。一人が誠肝にしみ、衣装櫃の蓋押開け、大盡姿引かへて、以前の紙子身にまとひ、す／＼出る伊左衛門、伊左助右衛門、夕霧、おれ故段々の心遣ひ、何にもいはぬ、諸事このなりで推量しや」と、いふに二人は顔見合せ、「覺悟とはいひながら、室町藤屋の旦那殿の、是がなれの果かいの」夕霧此お姿見ては、アイ、一倍思ひ得切らぬ」助右といて、五百兩といふ金かなければ、外へ身請の極るお身」十郎「チ、太夫が身請は身どもがする」と、障子ぐわらりと田舎大盡、はつと驚き立ちのけば、十郎「イヤサ、何方へも逃がしはせぬ。身請の金子五百兩、則ち亭主喜右衛門、親方の相對濟んだれば、夕霧が身は身どもが儘、身請さへしたれば、武士の言分は立つ、乞食に身の穢れた傾城、侍の妻にはならぬ。廓を出た其跡は、

乞食めに報謝はうしゃにくれる、勝手次第たつに連れて行け」と、財布さいふを其儘なまじ投出せば、助五すけごそんなら此お金を下され、身請して添そはせと有る、どなたなれば此様な、お慈悲じひ深い」と顔見て恠おどろり、助右すけみぎ「ヤアこなたは日外いつあやの浪人、街かたりめぢやないか」十郎じちろ「ア、サ、いかにも其街、街つた金は藤屋から、息女への結納たひなの印しるし。其時藤屋へ返させては、お辻殿と伊左衛門の縁切れる、其離縁りえんをさせまい爲ため、態わざ街かたづた五百兩、則ち夕霧が身請金、今伊右衛門へ返辨へんべんすれば、街の算用さんよう濟すまうがの」助右すけみぎ「スリヤそれもやつぱりお情、ア、よう街つて下さりました。有難ありがたい盗人ろすび様へ、お禮れい」に伊左衛門、見れば見知りの、伊左いざ「ヤア阿波の十郎兵衛殿」十郎じちろ「コレ、阿波の客に近付ちかづきは有るまい、此一腰ひとこしは主人櫻井主膳殿の魂、手打になされた伊左衛門が、爰に居やう様がない。殿のお姫様の爲に、大名の假名かんなして、科人さかじんになつた譯わけは、心で譽ほめても譽まほられぬが世の誕うて、そこを察さつして世話せわするは、人の心になりかはつての恩返おんがへし。金銀の貢みつぎは盜賊の一徳、此五右衛門の銀十郎が受取つた、死んで仕廻まわうた伊左衛門、科の帳面ちやうめんさらりと消る、吉田屋の幽靈客、夕霧太夫も世間晴れて、幽靈殿と未來みらいかけて樂たのしめ召めさ」と、粹すな捌さばも主人のかはり、割符わりふを阿波の銀十郎は、仁義じんぎ正ただし盗人どすびなり。次の間より喜左衛門、氣きの毒どくさうにおづく、出で、喜左きざ「最前さいぜんから何もかも残のこらず聞いて居ました、去さとは思おもひがけもない、お前まへ様があの、噂うわさのお盗人どすび様でござりますか、お名なを聞きい

て肝玉が顛り返り、胴顛が出ましたが、人には添うて見いぢや、段々聞けばさすが大きい御商賣をなさると程あつて、譯の立つた粹様、いや又、此方のお客も揃ひも揃うた、一人は幽霊一人は門立、一人は大それたお客様。扱と、夕霧様の身代、あなたの方から出ました金を、親方へ渡しまして、ひよつと跡でほくは来やしよまいがな」十郎「何さく、五右衛門の銀十郎、たとへ明日召捕られ、いか躰の責にあうとても、同類もいふ男ぢやない、勿論お手前達に難儀かけてよいものか。主人の御用達するまでは大事の體、手足の付いて有る間は、めつたに捕へられもせぬ男、氣遣せずと金渡して、親方に落付かせいさ。亭主けふの世話代、有合ひの金子、取ておきやれ」と打つ露も、氣味惡さうに、喜左「ハイ、いやもう是には及びませぬ、あなたに納めて置かしゃつて」十郎「ハテよいはさ、どうで是からせきく來申す」「夫は近頃お氣の毒、是にお懲り遊ばして、必ずお出下さりますな。ソレ中居衆、ぬしう様のお歸りぢや。夕霧様の廓の名残、男ども駕いうて、來いよく」と手を叩く。上の女下女、「太夫様、マアおめでたい、身請は濟んでも伊左様の、變つたお姿おいとしゃ」「ホンに馴染としをらしい、いつも門出の見送りには、傍輩女郎の祝ひの發句、今日の身請は袖乞の、泊定めぬ旅の空、歌や連歌のわけぢやない。敷島さんや金吾主にも、跡で宜しう傳へてゑ」「アイく、せめての饒別に、旅の用意の三尺手拭、世

帯なさるりや入る物」と、襟前垂お徳が進上、「お前に貰うた祐天様の、守でお癩の出ぬ様に」「わしや太夫様に放されて、是から便が」なく禿、泣くく出る門送り、いつの間にかは郡兵衛、「御詮議の盜賊、阿波の十郎兵衛のがさぬ」と、いはせも立てず銀十郎、足首取つて長持へ、はつたりひつしやり跡しら波、打連れてこそ 三重歸りけれ。

第七

道行思ひ富士

鐵柴付は、娘心の離れ時、羽子板の繪の雛様に、戀といふ物知り初て、殿御待つ夜の辻よ辻、お辻は二世と親々の、その約束も名ばかりに、只思ひ寢の夢にだに、藤屋を見たし懐かしの、何所をあてに大阪の、まぢくになりし世の噂、若しも此世に在せずば、長き末來へ嫁入と、思ひ詰ても振袖に、涙片敷く手枕に、馴し家居を立出て、現の闇に迷ひ行く、心の内ぞやるせなき。戀風や、其扇屋の金山と、名に立登る夕霧が、降りみ降らずみ空情、あはぬ客衆はいくよさか、裏紫の頬被り、深いと人も赦色ゆかり藤屋の伊左衛門、忍ぶとすれど古の、花は嵐に落果し、身の行末と定めなき、水の流のうき苦海、紋日々々の八文字、禿立から生花の、水上初めし昔より、可愛男は只一人、外の客衆へ空言の、誓紙の鳥後朝に、泣かすも熊野の御罰かや。過し口

舌は吉田屋の、二階さしきの揚の客、それをひそりの廻氣な、萬才傾城置いてくれ、見るも厭にまします、心の腐つた客萬才、よく客にごまんざい、今日立歸るあしたより、外の色と仕かへけるは、誠に目出度う候ける。夕「そりや何いはんす伊州さん、此夕霧をこな様は、まだ傾城と思うてか。去年の冬から丸一年、二年越に音信なく、それが嵩じて癩の種、前藥と煉藥と、鍼の力で漸と、命繋いでゐたものを、愛想盡しは何事」伊「と、泣くは女郎のお定り、客に逢うての空涙、雨の如くに降らす故、たいうと是を名付たり」夕「アレまだ酷い事計り、癩が嘘なら是見て」と、じつと取る手にさすが又、いなにはあらぬ引舟の、綱が機轉の一つ夜具、後は互にいふ事も、何の可愛が高ぞかし。おなじ戀路の迷ひ道、お辻は見るより走寄り、其なう伊左衛門様かいの」と、其儘膝に浮く露の、たまに逢うてもそれぞとは、得も夕霧が氣をかねて、夕「ついに見しらぬ女中様、いづくの誰」とよそめければ、其覺えがないとは餘りぞや、親と親とのいひ名付け、嫁といふ名は有りながら、袖も得詰す此儘で、尼に成れとのお心か、夫も誰故川竹の、つれなき霧に隔てられ、水に數書く浮れ舟、焦れ死ねとは胴慾」と、うき年月の溜涙、早汲取りし粹の徳、夕「お辻様とはあなたかへ、おいとしほいともお道理とも、かうした定る奥様の、私故とも思さうが、ほんに誓文お二人の、中を隔つる心はない。それ計りは辻さんの、お氣の廻りのすね詞、

そも逢ひかよる始めから、女房はないと間に合な、今更退くにも退かれぬは、いとしらしいが病ぢやと、勘忍して」とかき口説き、すがる袂の妻と妻、町と廓の品かはり色は變らぬ一筋や、「傾城の眞實、誠が知らせたい」「コチャ眞實殿御に思はれて、色里の一夜は勤がして見たい」一夜の情有りもせぬ、つらき戀しさ可愛さの、義理と義理とに絡まれて、藤屋も心ばらくの、一雨を誘くる、嵐を人と忍ぶ身は、そこよ木蔭を尋ねわび、走れど跡へ夢心、覺ては現空蟬の、泣音ばかりや残るらん、夢の浮世に借駕籠の、假寢の夢や結ぶらん。駕籠「ヤイ權よ、旦那殿はきつゝい魔」「ホンニナア、どりや起さう」と、駕籠のたれを引上げて、「申し」とゆり起せば、ふつと目覺す伊左衛門、走り出でれば引きとどめ、駕籠「ア、申し、どこへお出でなされます」と、言ふにはつと心付き、伊左「ム、正しうお辻と夕霧が格氣の焔、扱は夢で有つたか」と、ほつと溜息つく計り。二人の駕籠は合點行かず、駕籠「エ、聞えた、コリヤ夢がな見やしやりました物であらう。サア申し、極の長町裏、毘沙門でござります」伊左「ヲ、いかい大儀でござつた、ソレ駕籠賃」駕籠「ハイ、ハイ、ハイ、そんならお靜にお出なされませい、又住吉參の節は、お乗なされて下さりませ、サア、こい」と駕籠昇上げ、別れてこそは歸りける。かよる所へ息急、とつば株の武太六、それと見るよりハット計り、笠傾けて行かんとする。武太六「コリヤ伊左衛門、おれを見

て辻うとは横著者、われに逢ふと思つて、今長町に行く所、よい所で出つくはした。取かへた銀今受取る、サア渡せ」伊左「成程御尤去りながら、昨日も状で申した通り、今と云うては調はぬ、どうそ明日中に」武太六「ヤア黙れ、コリヤ一昨日というた日限が切れたぞよ、われも昔は藤屋の伊左衛門と云ふ大身代、今素寒貧になつても、別家の手代が貢では呉れますけれど、都度々々には云ひにくい、身分にちつと入用な銀、男と見込んで頼みますと、手を摺て頼んだ故取かへた五十兩、かよりの夕霧めと、汝が中に遣うた銀、半時も待つ事ならぬ。サア今渡せ」伊左「サア今というては」武太六「無いとぬかすのか、此方にも急に入用な事が有る、サア今戻せ待つ事ならぬ」伊左「ソリヤ餘り無理といふ物」武太六「何が無理ぢや、金借りてまだ其上に無理と云はふが猶ならぬ、是非戻さにや代官所へ、サアくこい」と引立て行んとする所、疾より立聞銀十郎、武太六が手をもぎ放し、突退れば、伊左「ヤア銀十郎殿」十郎「伊左衛門様、氣遣せずと黙つてござれ」と、落付く詞に、武太六「ヤイ銀十郎、いらざる所へ出て何で邪魔する」「チ、先にからの様子皆聞いた、高が金づく、此お人様の事なれば、私が世話せねばならぬお方、その銀の出入私に免じて、今日はマア待て貰ふ。コレおれも銀十郎というては、誰知らぬ者もない男、われも又とつば株の武太六というて、ぐすり中間の粹方なれど、餘り綾拔のせぬ臺詞、取りかへ

た銀高詮議の仕様も有れど、借りたが誤り、今は云はぬ。五十兩なら五十兩にして、此銀十郎が待つて貰はふかい」武太六「ムン挨拶人か面白い、それなら待つてやらうが、明日の晩限に急度濟さうといふ證文が書て貰ひたい」十郎「何ぢや證文書け」武太六「ハテそつちに違はぬ慥な證據、それが厭なら伊左衛門を代官所へ引きすつて行く。サアくどうぢや」と弱身に付込む一言に、十郎成程成程、氣の濟む事なら證文書かう」伊左「ハテ夫では」十郎「コレく伊左衛門様、私が胸に有る事、氣遣ひは御無用」と、矢立の筆をおつ取つて、さらくく」と書き認め、「是で能いか」と指出せば、受取て熟くと見、武太六「判は無ても汝が直筆、必ず明日の晩ぢやぞよ」十郎「ハテ馬鹿念つかずと早う去ね」武太六「ヲ、いぬるをわれに習はうか」と、足も心もとつばかぶ、鼻いからして立歸る。伊左衛門打萎れ、伊左「いつぞやこなたの情により、夕霧と一緒に居れど、少しなりとも助右衛門の、世話を助けうと思ふ故に此始末、假初ながら五十兩と云ふ金、又もよこなたに苦勞をかけ、もしや難儀に成るまいか」と、涙ぐめば、十郎「ハテお前をお世話するはお主への恩がへし、御禮には及びませぬ、明日の晩迄受合つた詞は金鐵、お氣遣なされますな。モウ追付日も暮れば早うお歸り」伊左「そんなら今の金の事は」十郎「ハテよござります、何もかも私任せ、おさらばく」と銀十郎、玉造へと立歸る。跡見送りて伊左衛門、伊左「エ、頼母しい十

郎兵衛殿」と、手を合せて後影、拜む心の細道傳ひ、罪科防く水晶の、數珠も涙に笠の内、伊左「ヤアお弓殿」お弓「伊左衛門様、是はく思ひも寄らぬ、マア此間は暫くお目に」伊左「さればされば、逢はぬが先とたつた今、銀十郎殿にもお目に懸り、又我故に差詰た金の才覺、お弓殿の手前も氣の毒」お弓「チ、あのおつしやる事わいの、お世話致さにやならぬおまへ、それは少しも厭はねど、只氣がかりは夫の身の上、ハテ如何がな」と目に溜る、涙隠せば伊左衛門、伊左「コレお弓殿、見ればそもじは涙ぐみ、顔の色もきつう悪いが、心持でも悪いか」と、尋ねにお弓は打萎れ、包めども色外に顯はるよ、お弓「お話し申すも恥しき夫の身の上、幸ひ傍に人もなし、私が病の元、コレ是を見て下さりませ」と、上著の肩を脱ければ、下には淨土の五條袈裟、懸けしは如何にと伊左衛門、猶も不審は晴やらず。かよる所へ鈍才坊、勸化廻りの戻りがけ、何事やらんと立聞くと、知らぬお弓は顔ふり上げ、お弓「御不審は御尤、いつぞや夫が勘當の詫、願へど叶はぬ其場の仕誼、兼て主人のお預りありし殿の重寶、紛失して行方知れず、その刀の詮議を仕出し、それを功に勘當の詫言せんととつ置いつ、忠義一圖に夫十郎兵衛、切取り盗も刀の詮議、お主の爲とは云ひながら、盜賊術と呼ばれたる其科は遁れ難く、今日や召捕るよか、明日や夫の身の上かと、日影を待たぬ憂思ひ、コレ此袈裟はいつぞやお寺にて、盗み取つたる打

敷と、聞いてはつとは思へども、是幸ひと我々が袈裟にかけ、お仕置きにあふならば、少しは佛のお助にて、せめて未來は夫と俱に、成佛願ふ夫が身の上、是に付けても思ひ出すは、三つの時國に残せし娘のお鶴、嘸二親を尋ねうと、思ふ程猶此身の罪、命の内に今一日、推量有れ」と泣く涙、空かき曇る春雨の、又降りしきる如くなり。伊左衛門涙にむせび、伊左「ア、段々のお話、が最前我身の難儀の時、五十兩といふ金を、明日中に戻す請合、今の様子を聞いた上は、どうもお世話も」お弓「ア、イエ、夫が一旦お受合申した事は返せぬ氣質、胸にせまつてあられもないお話し、日も暮ればお別れ申しませう、いかう暮ぬ中早うお歸り、さらば」と暇乞、伊左衛門はしをくと、長町さして歸りける。お弓も泣目を押拭ひ、立歸らんとする所に、最前より様子を聞き注進したる鈍才坊、捕人に案内し駈來り、鈍才坊「ソレあの女遁すな」と、云ふにお弓は悔りし、お弓「コリヤ何となされます」鈍才坊「ヤア何ととはまがくしい、最前様子は慥に聞いた、いづぞや寺へ盗にうせたは儂が夫、其時盗んだ打敷を、袈裟にかけたが慥な證據、ヤア隠してもモウ遁れん、サアうせをれ」と立寄る鈍才、心得お弓が早足の柔術、「シヤ癡れ者」と取付く捕人、右と左へ廻返され、又取つくを向ふつき、體は撓むお弓が早業、前へどつさり投付れば、後擲の薦葛、身をかい沈んで眞倒、一度にかよるをお弓が氣轉、砂を掴んで投げかくれ

ば、眼へ入つてあいたしこ、狼狽廻る暗紛れ、長町泊の彈語り、替女がとほく行き當り、かつばと轉べばしてやつたと、折重つて大勢が、押ゆる隙間嬉しやと、足早にこそ三重。

第八

よしあしを、何と浪花の町はづれ、玉造に身を隠す、阿波の十郎兵衛本名隠し、銀十郎と表は浪人、内證は人はそれとも白波の、夜のかせぎの道ならぬ、身の行末ぞ是非もなき。人の名を、神と呼るゝ其神は、京の吉田の神帳に、入た神かや入らぬのか、野暮とも見えぬ恐すいほう、とつば株の武太六が、蚤取り眼に暖簾押上げ、武太六「銀十郎内にか、用が有て逢ひに來た」と、いふ聲聞て女房立出で、女房「ヲ、武太六様かようお出、久しう逢ぬがまあ御無事で」武太六「イヤコレお内儀、逢ぬの無事なのと地を打つた臺詞ぢやない、無頼者の伊左衛門に貸た金、爰の銀十郎が受合てけふ中に濟す筈、それで其金受取にきたのぢや、きりく逢して下され」と、聲も辰巳の上り口、尻まくりして高胡座、女房「ヲ、其様に聲高にいはすと、靜に物を言しやんせ。こちの人は夜が更たので、今晝寢して居られます」武太六「何ぢや晝寢ぢや、夜が更けたとは、エ、聞えた、夜通しの挺摺かい、好い機嫌ぢやな、挺摺る金が有るなら、貸た金戻して行け」と、いふ

に女房が不審顔、女房「ノ魚釣に行くに金が入るかへ」武太六「ヤそりや何いふのぢや」女房「テモお前、てこつる金があるなら戻して行けと言はしやんすぢやないかいな、わしや又沙魚釣やうに白狭海老でつるかと思へば、金で釣るてこといふ魚はどんな魚でござんすぞ」武太六「エ、粹方の鼻に似合ぬきつい太郎四郎ぢや、金を餌にする魚が有つてたまるものか。コレてこづるといふはの、れこさの事ぢやわいの。此方も粹方の女房なら、ちつとてんしよでも覺えさうな物ぢやがな、今の世界に青二引ぬ者と、お染久松語りぬ者は、疫病を受取るといひの。こんな事言ふ間はな、銀十郎くゝ起て來んかい、怖い事は何も無い、高が借錢乞に來たのぢや、起ざ起しに行くぞよ」と、喚くを宥める女房も、持抜うて見えにける。銀十郎「エ、あた喧しうぬかすので、可惜夢を覺しをつた」と、欠まじくから立出る、銀十郎が寢惚聲、武太六「コリヤ銀十郎、汝あマア夢所ぢや有るまいがな、今日中に戻さうと、約束の通り受取に來たのぢや。サア今渡せ受取う、厭と言や此證文で直に代官所へお願ひ申す、が、汝でんどへは出られぬ身分ぢや有らうがな」と、病づかすは疫病の神と名の付く奇特なり。銀十郎「ハテ喧しい、日暮迄は今日の内、大方工面も出來て有る、是から直に先へ行て、才覺して來る程に、大儀ながら晩方來い」と、聞ては追強も得いはず、武太六「ハテ晩方迄なりや待てやろ、其かはり暮六をごとと打つと、直に受取に來る程に、其時になつて

からならぬなどと、根太切りはつた所で、三どつば打たれた様に、がつくりさすのぢやないかよ、今度ちがへば直に代官「銀十郎」サア呑こんでゐる、最一度行たら慥に工面の出来る金、汝も去ぬなら連だとかい」と、云ひつゝ出る袂をひかへ、女房「其様に慥にいうて、何ぞ當の有る事か、又違へば氣の毒な、まあ二三日も云ひのべて」武太六「イヤならぬ、二三日の事は扱置き、半時も待つ事ならぬ、サアく〜こい」とせり立つる。武太六伴ひ十郎兵衛、我家を出て行く跡へ、引違うて息急と、飛脚と見えて草鞋がけ、内を覗いて、飛脚「申し此狀届けます」と、投出す一通女房取り上げ表書に、女房「銀十郎殿へ急用と書た計りで下の名は」飛脚「内儀様覺がござりまするか、私も人傳に、事遣つて参りましたれど、必ず先へ直々にと、念入れて申されましたが、内方へくる狀かな」と、念を入るれば、女房「ア、成程々々、下の名はなけれども、表書の手は慥に此方に見知りがござんす、置いて去んで下さんせ、夫も今は留守なれば、歸られ次第見せませう。マアはいつて煙草でも」飛脚「ア、否々、まだ外へ届ける狀、急用なればもうお暇、御返事あらば跡から」と、言捨て出る町飛脚、もと來し道へ立歸る。跡打眺め女房が、心がかりと封押切り、よむ度毎に胸りびくり、女房「ヤアこりや是、夫銀十郎殿を始め、仲間衆へも吟味がかより、詮議嚴く成つたる故、捕へられし者も有り、最早遁れず立退くとこの知らせの狀。スリヤ夫十郎兵衛殿の身

の上も、けふ一日に迫つた難儀、昨日長町裏で危い所を漸遁れ、ヤレ嬉しやと思ふ間もなく、今又此狀の文體では、中々斯うして居られぬ所、我とても女房の身、殊に街の同類なれば、罪科遁れぬ夫婦が命、今更驚く氣はなけれど、一合取ても侍の、家に生れた十郎兵衛殿、盜賊街と成り果てしも、國次の刀詮議の爲、重い忠義に軽い命、捨るは覺悟と云ひながら、肝心の其刀、有家も知れぬ其内に、若し此事が顯はれては、是迄盡せし夫の忠義、皆徒勞事となるのみか、死んだ跡迄盜賊に、名を穢すのが口惜い。盜街も身欲にせぬ、女夫が誠を天道も、憐有つて國次の、刀の詮議濟む迄の、夫の命助けてたべ」と、心の内に神佛、誓は重き觀世音、願禮歌 補陀落や、岸うつ波はみ熊野の、那智のお山に、響く瀧つ瀬。年はやうくとをぐの、道をかけたる笈摺に、同行二人と記せしは、一人は大悲のかけ頼む、歌故郷を、逢々ことに紀三井寺、花の都も近くなるらん。願禮、願禮に御報謝」と、いふも柔しき國訛り、女房「テモしをらしい願禮衆、ドレドレ報謝しんぜう」と、盆にしらけの志、願禮「アイく有難ござります」と、言ふ物腰から爪はづれ、可愛らしい娘の子、「定めて連衆は親御達、國は何國」と尋ねられ、願禮「アイ、國は阿波の徳島でござります」女房ム、何ぢや徳島、さつても夫はマア懐かしい、わしが生れも阿波の徳島。そして父様や母様と、一所に願禮さんすのか」願禮「イエく、其父様や母様に逢ひたさ故、

それでわし一人西國するのでござります」と、聞いてどうやら氣にかよる、お弓は猶も傍に寄り、お弓「ム、父様や母様に逢ひたさに西國するとは、どうした譯ぢや、それが聞きたい。マア其親達の名は何といふぞいの」順置「アイ、どうした譯ぢや知らぬが、三つの年に、父様や母様も、わしを祖母様に預けて、何所へやら行かしやんしたけな、それでわたしは祖母様の世話になつて居たけれど、どうぞ父様や母様に逢ひたい顔見たい、それで方々と、尋ねてあるくのでござります。父様の名は阿波の十郎兵衛、母様はお弓と申します」と、聞いて悔りお弓が取付き、お弓「コレコレ／＼アノ、父様は十郎兵衛、母様はお弓、三つの年別れて、祖母様に育られて居たとは」疑ひもない我娘と、見れば見る程稚顔、見覺のある額の黒子、ヤレ我子かなつかしやと、言はんとせしがイヤ待てしばし、夫婦は今もとらるゝ命、元より覺悟の身なれども、親子といはど此子に迄、如何な憂目がかよらうやら、それを思へばなま中に、名乗だてして憂めを見んより、名乗らで此儘歸すのが、却つて此子の爲ならんと、心を靜めよそ／＼しく、お弓「チ、／＼、それはまあ／＼年ほも行かぬに遙々の所を、よう尋ねに出さしやつたなう、其親達が聞いてなら、さぞ嬉うて／＼飛立つ様にあらうが、儘ならぬのが世の憂節、身にも命にもかへて可愛子を振捨て、國を立退く親御の心、よく／＼の事で有らう程に、酷い親と必ず／＼恨まぬがよいぞや」順置「イ

エイエ勿體ない何の恨みませう、恨る事はないけれど、小さい時別れたれば、父様や母様の顔も
覺えず、餘所の子供衆が、母様に髮結うて貰うたり、夜は抱れて寢やしやんすを見ると、わし
も母様が有るなら、あの様に髮結うて貰ふ物と、羨しうござんす。どうぞ早う尋ねて逢ひたい、
ひよつと逢はれまいかと思へば、それが悲しうござんす」と、泣い噓するいちらしさ。母は心
を消え入る思ひ、「扱もく世の中に、親と成り子と生るゝ程、深い縁はなけれども、親が死だ
り子が先立たり、思ふ様にならぬが浮世、こなたもどれ程尋ねても、顔も所も知らぬ親達、逢れ
ぬ時は詮ない事、もう尋ねずと國へ去んだがよいわいの」願屋、イエく、戀しい父様や母様、
譬いつ迄かよつてなと、尋ねうと思ふけれど、悲しい事は獨旅ぢやてよ、どこの宿でも泊めて
は呉れず、野に寢たり、山に寢たり、人の軒の下に寢ては擲れたり、怖い事悲し事、父様や母
様と一所に居たりや、こんなめには逢ふまい物を、何處に如何して居やしやんすぞ、逢ひたい事
ぢや逢ひたい」と、わつと泣出す娘より、見る母親はたまりかね、おヨ、ヲ、道理ぢや、可愛やいち
らしや」と、我を忘れて抱付き、前後正體歎きしが、是程親をしたふ子を、何と此儘去なされう、
いつそ打明け名乗らうか。イヤく、それでは此子も同じ罪、其時の悲しさを、思ひ廻せば去すが
爲と、おヨ、ヲ、段々の様子を聞き、我身の様に思はれて、悲いとも情ないとも、いふにいはれぬ

事ながら、兎角命が物種、まめでさへ居りや、又逢はれまい物でもない。コレ仕付ぬ旅に身を痛め、煩ひでも出りや悪い、何所をしやうどに尋ねうより、其祖母様の方へいんで居るとの、追付父様や母様が、逢ひに行てぢや程に、悪い事はいはぬ、思直して是から直に國へ去んで、随分まで親達の、尋ねて行かしやるを待つて居るのがよいぞや」と、宥め賺すを聞分けて、願唄「アイ、忝うござります、お前が其様に言うて、泣いて下さりますによつて、どうやら母様のやうに思はれて、わしや爰が去にとむない。どんな事など致しませう程に、申し御家様、お前の傍にいつ迄も、わたしを置いて下さりませ」
「エ、悲い事を云出して又泣かすのかいの。先からわしも子の様に思うて、爰に置きたい去なしとむないと、様々思ひ廻せども、爰に置いてはどうも爲にならぬ事が有るによつて、それで難面去なすのぢや程に、聞分けて去んだがよいぞや」と、言ひつゝ内へ針箱の、底を探して豆板の、まめなを悦ぶ錢別と、紙に包んで持て出で、
「コレ何ほ獨旅でも、たんと錢さへありや泊める、僅なれども志、此銀を路銀にして、早う國へ去にや、必ず、煩うてばしたもんな」と、銀を渡せば押戻し、願唄「嬉しうござんすれど、銀は小判といふ物を、澤山持てをります。そんなりやもう參じます、忝うござります」と、泣く泣く立つを引きとどめ、
「それはさうでも是はわしが志」と、無理に持たして塵打拂ひ、「コ

レもう去にやるか、名残が惜しい、別れとむない。コレ今一度顔を」と引寄せて、見れば見る程胸せまり、離れがたなき憂思ひ。それと知らねど誠の血筋、名残惜けにふり返り、何所を如何して尋ねたら、父様や母様に、逢はれる事ぞ、逢はしてたべ、南無大悲の觀音様、父母の惠も深き粉川寺、佛の誓頼もしきかな、泣くく別れ行く跡を見送りく、仲上り、も「コレいま一度此方向いてたも。折角長の海山越え、艱難して憧憬れ尋ぬるいとし子に、不思議と逢ひは逢ひながら名乗らで去なす母が氣は、どの様に有らうと思ふ。狂氣半分、半分は死んで居るわいの。まだ長生のある子をば親故路頭に立たすか」と、其儘そこにどうどふし、消え入る計り歎きしが、起き直つて涙を押へ、も「イヤくどう思ひ諦めても、今別れては又逢ふ事はならぬ身の上、譬難儀がかよらばかよれ、又其時は夫の思案。程は行くまい追付いて、連れて戻らうさうぢやく」と、子に迷ふ、道は親子の別れ道、跡を慕うて尋行く。既に其日も入相の、かねの工面も引違ひ、我家へ戻る十郎兵衛が、順禮の子の手を引いて、十郎「女房共戻つたぞ」と、内へはいつて見廻し見廻し、「こりや日暮紛れに火も點さず、何處へ行た」と咳きく、行燈ともし煙草盆、さけてどつさり高胡座、十郎「コレそこな子、爰へおぢや。今戻る道筋を、ソレ乞食共が寄集り、汝身を剝いで銀取らうとぬかしてをるを聞た故、夫でおれが連れて戻つたが、汝身や銀でも持つて居るか」

願齋「ハイ、よその伯母様に貰うて持つて居りまする」十郎「ム、何がそんな事を悪者共がかんばつて、ヲ、危い事〜。そして其銀はどれ程有るぞ、ドレ伯父に見しや」願齋「アイ、是程ござんす」と、貰うた銀を差出せば、十郎「ム、こりや小玉が五十匁ばかり、もう外には銀はないか」願齋「イエまだ小判といふ物がたんとござんす」十郎「何ぢや小判が澤山有る、アノ小判が。てもマア夫はよい物を持つてゐるや。コレ此邊は用心が悪いによつて、其様に銀持つて居ると、今の様に人に取られて仕舞ふ。ドレ伯父が預かつてやらう、爰へ出しや」と、武太六に約束の、足にもなるかと心の工面、欺しかくれど合點せず、願齋「イエ〜、此小判の財布には、大事の物が包んで有る程に、人に見せなと祖母様が言はしやんしたによつて、誰にもやる事成りません」と、大事にする程猶見たく、脅して見んと目を瞋らし、十郎「其様に隠すと爲にならぬぞよ、痛いめせぬ内ちやつと伯父に預けておきや」願齋「それでも大事の銀ぢやもの」十郎「サア、大事の銀ぢやによつて、持つて居ると爲にならぬ、片意路いはすと預けておきや」と、いふ程こはがる子供心、願齋「こんな所に居る事いや」と、逃出る首筋引搦めば、十郎「アレ怖い〜」と泣出す。十郎「コリヤ喧しい〜、近所へ聞える、聲が高い」と、口へ手をあて、十郎「コレ怖い事はない、有やうは、わしもちつと銀の入る事が有るによつての。何ほ程有るか知らねど、一三日預けてたもや。其

内には又拵へて戻さう程に。まあそれ迄はこちの内にはゆるりつと逗留仕や、又觀音様へも伯父が連れて參る。チ、よい子ぢや、聞分けてサアちやつと貸してたも」と、兩手放せばがつくりと、そこへ其儘倒るゝ娘。十郎「コリやく〜何とした〜、どうした」と、言ども更に物言はず、息も通はぬ即死の有様。十郎「ヤ南無三寶、コリヤ〜目がまうたか、コリヤ順禮の娘やい」と、呼生け呼生け口押開け、「コリヤ氣付も水ももう叶はぬ」ホイはつと計りに俄のはいもう。十郎「エ、聲立てさせじと口へ手を當てたが、思はず息を止め、夫で死んだか。ハア、こりやマア不使」と計り呆果たる折からに、表へ聞ゆる足音は、女房ならんと蒲團で死骸、つよみ傳ひをいきせきと、戻るお弓、ち、こちの人戻つてか、サア〜ちやつと行て尋ねて〜」とせき切る女房。十郎「ヤイ白癡者、跡先もいはず尋ねてとは、何を尋ねて」「サア、お前の留守へ、國に残した娘のおつるが、不思議と爰へ來たわいの」十郎「ヤ何ぢや、娘が來たとは、そりや母者人と一所にか、どうして來たぞ」ち「イエ〜おつる一人でござんする。様子をいへば長い事、不思議に娘と知つた故、飛付く様に思うたれどな、悲しい事はお前もわしも、お尋ねの身分なれば、今知れぬ身の罪科を、何にも知らぬ娘に迄、俱に難儀をかけうかと、わざと親子の名乗もせず、氣強う言うて此内を、去なした事はいなしたが、跡で思へば思ふ程、どうも捨てて置れぬ故、直に跡から

尋ねに行たれど、影も形も知れぬ故、お前と手分して尋ねうと思つて戻つた。サアちやつと行て尋ねて」と、聞くや聞かずに、十郎「イヤ白癡め、どんな事が有るとて、俺にも知らさず追ひ去なすは、鬼でもそんな胴慾な事はせぬわい。イヤ斯う言うては居られぬ」と、かけ出でしが、一郎「コリヤそして幾歳計りで、如何な著物著て居るぞ」
 十郎「知れた事、年は九つ、中形の振袖に、笈摺かけて」
 十郎「何ぢや、アノ笈摺かけて」
 十郎「アイ笈摺も二親の有る子ぢやによつて、兩方は茜染」
 一郎「アノ茜染に中形」
 十郎「アイホイはつと、肝に焼鐵刺さると心地、エ、コレ隙が入る程心が濟まぬ、お前は跡からわしや先へ」と、いひ捨てかけ出すお弓を止め、十郎「コリヤもう尋ねずと止しにせい、娘は疾うから戻つて居る」
 十郎「戻つて居るとは、そりやどこに」
 十郎「ソレその蒲團の内に、よう寢入つて居るわい」と、言ふに不審も立縋の、蒲團を明けて顔見るより、十郎「チ、ほんに娘ぢや、チ、嬉しやく」。お前もこんな事なら疾からさうと言つたがよい、人に息急揉まして、エ、嗜ましやんせ」と、恨みながらも氣はいそぐ、十郎「何とマア見やしやんしたか、大きいならうがな。そしてまあ滅相な、如何に草臥れて居ればとて、からけも下さず、笈摺も懸たなり、ドレく帯解いてのつくりと、久しぶりで母が添乳」と、笈摺はづし帯とくく、見れば手足も冷え渡り、息も通はぬ娘の死骸。十郎「ヤアコレこりや娘は死

んで居る、どうして死んだどうして」と餘りの事に涙も出ず、立つたり居たり夫の傍、お母「あの娘は、ド、ド、どうして死んだ、お前様子知てぢや有らう、サアいうて聞かして〜」と、氣も取のほす有様を見るに脾肉も離ると切なさ、十郎「ホ、道理ぢや尤ぢや、様子というたら因果づく、先きに内へ戻る道、其娘が銀を持つて居るを、非人共がよう知つて、取るのはぐのと聞いた故、可愛さうにと連れて戻り、様子を聞けば銀も有る故、少々なりとも武太六に返す上面、二三日貸してくれと、譯をいへども子供の事、聲山立てて泣き喚く、近所の聞えが氣の毒さに、つい口をおさへたが、息が詰つて、ソレ其様に死んで仕舞うた。エ、いぢらしい事したと、餘所の様に思うたが、夫が娘で有つたとは、物の報いか因縁事、コリヤ、怵へて呉よ女房」と、聞く程身も世もあらぬ悲しき、お母「そんならお前が殺さしやんしたか、ハアても扱も是非もなや情なや」と、母は死骸を抱上げ、「コレ娘、是程酷い親々をよう尋ねて來てたもつたの、獨旅で泊人はなし、野に寝たり山に寝たり、怖い事や悲しい事も、父様や母様に、逢いたさ故といやつた時は、悲しうて〜、身節も胸も碎ける様に有つたれど、そこをじつと辛抱して、親ともいはず去なしたのはの、わがみが可愛さ計り。其時留めて置いたらば、かういふ事は有るまいに、去なした故の此間違ひ、夫から起つた事なれば、殺さりやつたもわしが業、コレ堪忍してたもやた

もや、年はもいかで遙々の、道を厭す苦勞して、親を尋ねる孝行娘、親は夫には引きかへて、むごう難面う追返し、まだ其上に親の手で、殺すといふはア、何事ぞ、別れにいやつた順禮歌、父母の恵もふかき粉川寺、どこに是が恵が深い、こんなむごい親々が、廣い唐にも天竺にも、最一人と有る物か」と、死骸の顔に我顔を、押當てく抱しめ、泣涕こがれ伏沈む。銀十郎も後悔の涙五臓をしほりしが、いうて返らぬ事ながら、金の有る事得しらずば、かういふ事は有るまいもの、金が敵の死骸の懐、探して財布取出し、中改むれば金三兩、十郎「コリヤ是僅の金、いかい事も有るやうに、思違いがやつぱり因果」と、いひつゝ引出す財布の内、十郎「十郎兵衛殿夫婦の衆へ、ム、コレ、書いたは正しう母の筆」と、封押切つてよむ文體、「わざく認め送りゆく、國を立退かれし其日より、案じ暮すは互に親子の愛著にて、浮世の中の習なれば、くどう筆には記さず候、第一に申したきは日外申越れし國次の刀、郡兵衛に心を付けて密に手筋を求め詮義致し候處、則ち郡兵衛盜取り、所持致し候段、慥に聞出し候故、早速詮議と思ひ候へども、女子の身でなまなかの事を仕出し、却て妨に成つてはと差控へ、其元の有家を尋ね詮議させんと、孫のおつる諸共に旅の用意致し候内、遁れぬ無情の風に誘れ、力及ばず身まかり候故書殘し申候」十郎「ヤスリヤ母人は、お果なされたかいな。ム、此一通届き次第早々國へ立歸り、國次の刀を取

戻し、立身出世を草葉のかけより、くれぐれも待ちらう」十郎、スリヤあの郡兵衛めが所爲で、エ、母人の御最期残念至極」と云ひながら、有難きは刀の有所、是と申すも母の御恩、ハア、忝し嬉しやと、歎きの中の悦びを、聞いてお弓も顔を上げ、お弓、お袋様の御最期、一日の介抱もせず、別に不孝な嫁、せめて筐の其お文、わしにも讀ませて下さんせ」と、一通取つて涙ながら、「外に申す事はなく候へども、孤となりし係が事、是のみ黄泉の障りに候、神佛の恵にて慈なう其許にもしも尋ね逢うたらば、随分々々大事に育て給はるべく候、夫はく、器用者にて、物もよう書き琴も弾く、第一に縫物が手利にて、縮緬緞子の衣装迄、手際よう仕立て候やう、教へ置きらう、是計りは祖母が自慢に候まよ、對面の後ぬはせて御覽なされ、夫婦ながら譽めてやつて給はるべく候」お弓、チ、ばよ様の冥加ない。常々から蟲持にて、桑山がよう利き候故、たと持たせて置候まよ、もし蟲でも起つたならば、此子の年の數程、御呑ましなざるべく候、くどうもく、大切に育て頼上らうべく。是程大事にばよ様の、育て上げて下さんしたものの、思へば、胸欲な、惜や悲しやいぢらしや」と、又も正體なかりける。十郎、ヤアいつ迄言うても盡せぬ歎き、刀の有家知れる上は、彼地へ下り詮議せん」と、勇む折から表の方、俄に騒ぐ人聲足音、十郎兵衛きつと心付き、十郎、コリヤく女房、あの物音は必定捕手に違ひない、何百人

取捲とも、刀を我手に入れぬ内は、切つて切つて切抜る」と、娘の死骸引抱へ、泣入る女房を引立てく、一間の内へ入りにける。程なく来る捕手の大勢、捕手ヤア盗賊の銀十郎本名は阿波の十郎兵衛、此所に隠れ住む由、武太六が訴人によつて召捕に向うたり、尋常に繩かよれ」と聲々いへど音せぬは、捕手、風をくらうて逃げのびたか、家内残らず打壊て、人数は半分裏道へ、廻れく」といふ下家、天井障子佛壇戸棚、粉もなく碎く壁下地、隙間も漏さぬ大勢の、捕手相手に十郎兵衛が、大亂髪に働くを、我組み止めんと追取巻き、差付ける松明の火花を散して挑みしが、十郎兵衛一人に切捲られ、皆蜘蛛の子の散りくぐりに、逃行く隙間に女房が、「此間にちやつと十郎兵衛殿」「ヲ、合點」と駈出しが、立ち止まつて、十郎コリヤ女房、娘が死骸は何とした」「そりや氣遣ひござんせぬ、コレ此通り」と死骸の上、落散る戸障子積重ね、松明の火を差付けて、人手に渡さぬ火葬の營、南無阿彌陀佛と合す手も、別れ、別れて 三重立出る。

第九

國民も豊鳴戸の阿波の國、徳島郷の町はづれ、弓矢神とてはやす、武士は取別け町人も、参詣群集をなしにけり。往來も多き其中に、先を拂はす小野田郡兵衛、國一ばいに廣がりし、權

威を功に鼻たかぐ、跡に引添ひ海藏院、眞言祕密の行法も人に勝れし悪僧と、云はねど知れた人相見、家來諸共立休らひ、海藏院「イヤ申し郡兵衛様、何やら私にお頼みの事有る故、此所へ参れと急のお使、シテ御用の筋は、いか様の儀でござります」郡兵「ア、いやくさのみ氣遣ひな事ではおりない。イヤ何家來共、儕等は暫しの内社内にて待合せ、十郎兵衛を見付けなば、早速に相知らせ、油斷致すな、早行け」と、下部を遠ざけ小聲になり、郡兵「今日こなたを召寄せし仔細といつば、ちと密々に頼みたき旨有つて苦勞も厭はず此所へ、其段は御免々々、何と頼まれてくれられうや」海藏院「イヤモ様子は何か存せねど、當所の御家老郡兵衛様の仰しやる事、何しに違背仕らん。シテお頼みの密事はな」郡兵「ア、いやく、様子を語り違變有らば、郡兵衛が一事こなたの命にもかよはる事、何に寄らず他言せぬといふ慥な心底見た上で」海藏院「ム、御尤、其心底お目にかけん」と、嗜み持し矢立より、筆押取つてさらく」と、紙に誓も卽座の血判、小指喰切り誓紙の表、「斯の通り」と差出せば、其儘とつて疾くと見、郡兵「ム、他言なき誓紙の文言、讀むに及ばぬ貴僧の胸中、見届ける上は何をか包まん、密事といふは外でもなく、何卒こなたの行力にて、玉木衛門之助を調伏がして貰ひたい」海藏院「エ、あの御主人衛門之助殿を、調伏なさるよお心は」郡兵「シイ聲が高い、成程驚きは理、某存する旨あれども、衛門之助

殿が有つては後日の難儀事やかましい、そこを存じて此密談成就せば立身出世、貴殿とても悪しからぬ、身の納りは此胸に仔細は斯の通りぞ」と、語ればほくく打點頭うちうなづき、海藏院「お氣遣なされますな、某が行力にて七日の内に落命らくめいさす、行法奇特は我が數珠先、お心安く思召せ」と、聞いてぞくく小踊りし、郡兵「ホ、頼母たのもしょくく當座の施物」と一包み渡せば取つて押戴おしいたき、「アお志の此施物、受納致す」と取納め、海藏院「心も急げばすぐ様お暇」郡兵「ヲ、一時も早く立歸り萬事の用意を、早くく、必ず人に悟られぬ様」海藏院「イヤくそつとも氣遣遊はすな」と、人の難儀も身の欲に吞込む己が身の上と、知らぬが論陰陽師、別れてこそは立歸る。折から家來が慌しく、家來「お尋ねの十郎兵衛向ふの茶見世で見受けましたが、此所へ參るは必定、いかど計らひ申さん」と、聞きもあらせず、郡兵「ヲ、よくも知らせた、暫くの間影隠しだまし寄つて召捕らん、此方へ來れ」と郡兵衛は、家來引連れ伺ひ居る。斯くとはいざや十郎兵衛、母の報知に隨ひて、此程よりも立歸る心當どは郡兵衛に、たよる衛のとつ置いつ、思案工夫の後より、「十郎兵衛やらぬ」と雙方から、取り付く家來を引捕へ、何の苦もなく右左踏付けく仁王立、小野田郡兵衛聲をかけ、郡兵「ヤア十郎兵衛、江戸表より逐電して行方知れざる様子を聞けば、今の名は五右衛門の銀十郎といふ盜賊なるよし、當地迄も聞及ぶ、お構の此國へ立歸つたは運の盡、ソレ遁すな」と

下知につれ取捲く大勢、屈せぬ十郎兵衛、十郎「よい所へ小野田郡兵衛望む相手ぢや、サアこい」と、立かよらんず其氣色、どつこいやらぬと隔つる下部、シヤ面倒いと取つては投げ掛んで、ぐつと一しめひよろ／＼、しどろになつて見えければ、いらつて打込む郡兵衛が目先へすつとさし付くる、家來がからだで受身の備へ、切りも得やらぬ刀の手前、詮方もなく見えたる所へ、斯くと聞くより櫻井主膳後ばせに駈付ければ、十郎兵衛見るより、「ハ、ハ、ハ、はつ」と寄らんとすれど此場の仕讀、思ひはかつて櫻井主膳、主膳「ヤア儂憎い奴、さしとめおいた此國へ立歸つたる其上に、郡兵衛殿に刃向ふは身の程知らぬうざい餓鬼、某が駈付しを跡先知らぬ汝が心に、主従の縁に寄り又もや助け貰はんと思ひ詰めた其眼色、イヤモ見遁す事は扱置いて三寸繩にく／＼し上げ、屋敷へ引いて拷問する。覺悟せよ」とすつと寄り、腕首取つてぐつと捻上げ、「イヤ何郡兵衛殿斯く計ひし上からは、最早此奴に氣遣なし、先々刀をお納めなされ、十郎兵衛とは以前の事、今の呼名は銀十郎、櫻井主膳召取つた」と、口と心は裏表、かゝる繩目も御主人の、お情もやと十郎兵衛、いはぬ思ひぞせつなけれ。郡兵衛は當り眼、郡兵衛「サア此方から頼みもせぬに、我は顔に繩打たれしは、某を踏付けるのか、何と／＼」と嵩かけて、底の無念を押し隠し負けぬ顔して詰めかくれば、主膳「是は／＼御尤、手前左様の所へ氣も付かず、只御家來の手に

餘り御難儀と承り、聞捨ならぬも主人へ忠義、思ひ過した某が、繩かけたは重々誤り、縛めほど
 きお渡し申さん、ヤイ十郎兵衛、儂も命が助りたくば随分手柄に切抜けい、勘當したれば遠慮は
 ない。イザ郡兵衛殿受取り召れ」郡兵衛、是さく、其繩解いてたまるものか、やはり其儘受
 取ませう」主膳「イ、ヤさうは致さぬ貴殿の難儀を存ぜし故、以前の誼みも厭なく召捕つた某、何
 とやら其許を踏付けるとの御一言、尤至極に存ずるから、是非繩といってお渡し申するが、貴殿
 を立てる拙者が言譯、御覽なされ」と立寄つて、繩ときかくれば、郡兵衛「ア、是さく、それは
 畢、竟時のはずみ、申し過しは手前の鹿相其儘々々」主膳「イヤモ鹿相と有れば言譯おりない、殊
 に當月は貴殿の役目お渡し申す此繩つき。ヤイ十郎兵衛今聞く通り郡兵衛殿のお役目なれば、
 隣す程爲にならぬ、何もかもとつくりと、ナ、ソレ、打明けて申上けたら叶はぬ迄も一命を、助
 かる筋が有るまいものでもサないと思へど、是とても此方に少しも構はぬ事、何と郡兵衛殿左様
 ではござらぬか」郡兵衛「何のく、譬どの様にぬかしても助かると云ふ字は毛頭ござらぬ、狼藉
 ひろいだ其替り、拷問の仕様はさまん、覺悟ひろけ」と脅しても、びくとも思はぬ大丈夫、
 十郎「イヤ申し主膳様、お久しぶりでお顔を拜し、其甲斐もない淺ましき此態にてお別れ申し、命
 の内に今一度、お目にかゝるは十郎兵衛が、胸にとつくと言譯の、工夫を致し、此縛めの解き

様を、譬へて申さば大切な刀を鞘に納めた思案、先夫迄はおさらば」と、わつて云はねど刀の詮議。主膳は態聞かぬ顔、聞いた顔する小野田郡兵衛、郡兵「イヤ、ごくにも立たぬ世迷言、ソレ引立て」と呼ばれば、はつと答へて大勢に、引立てらるゝ十郎兵衛、心一つに國次の、詮議とさらに郡兵衛が、嵐に散らぬ櫻井が、胸の刃金は直焼刃、引別れてぞ。三重

第十

主膳「ヤア暫く待たれよ、いづれも刀の虚實改めもなく、持参したは某が誤りとは云ひながら、代々預かる殿の重寶、何望み有つて此刀隠し置かう様もなし。察する所此盜賊はたしか外に」といはせも果てず、郡兵「ヤア其言譯暗い、殿の誕生三月三日、吉例の通りお屋敷にて飜る役目は貴殿と拙者、さるによつて今日内見の儀仰付けられ、立合の今と成り代々預かる其許が、盗まれたとばかりでは申譯立ちますまい、此通りを言上して殿の仰を聞く迄は、身動きさせぬ貴殿の身の上、只今より郡兵衛が預かる、まづ大小を渡し召され、違變ござらば某が踏付けて繩かけうか、何とく」ときめ付ける。己が盗みし刀の詮議、非道ながらも、差當る、言譯何と詮方も、無念を怵へ大小投出し、主膳「微塵聊か二心なき證據は、則ち家來十郎兵衛、召捕り渡せし我なれど

も疑ひかよりのし此丰膳、武士を捨てたる我魂、お預け申す上からは、郡兵衛殿のお心任せ」郡兵衛「テ、よい覺悟、ソレ侍中、丰膳を奥へ引立て」と、下知に隨ひばらくと、取捲く家來の先に立つさやけき空の月影も暫しは曇る胸の闇、是非もなく、立て行く。跡見送つて郡兵衛が開くる此方の一間には、高尾を假の座敷牢、戀とはしるき絹の香の姿は花も及びなさ、郡兵衛「コレサ君、なげ浮々とし給はぬ、我等そもじに執心から土手助に申付け、漸此比連歸り、押籠置くは人目を遠慮、能い返事さへし給はど誰憚す直に奥様、望を叶へ抱かれて寝るか」高尾「イ、エドの様に仰やつても、何の益なき此身の上、尼ともなして給はらば生々世々の御慈悲」と、手を合すれば、郡兵衛「ソリヤならぬ戀なればこそ此様に、人の目顔を忍びの一間、打明れば其通り、たつて厭といふが否や、憂目を見するが、サ夫でも厭か」高尾「驚憂目にあふ逆も是計りは赦して給べ、かう言ふが憎いと思さば、いつそ手にかけて一思ひ」郡兵衛「イ、ヤ夫もならぬ、惚れた程又憎さも百倍、返事さす思案を見せう。ヤア、土手助科人の銀十郎、早く是へ引出せ」と、聲に従ひ繩取に引立てられて十郎兵衛、刀の詮議爰かしこ尋ぬる充も白浪の、科を身にしる憂き繩目、見合す十郎兵衛高尾が恠り、高尾「ヤアお前は兄様、十郎兵衛様、爰へは如何して其繩目」と、駈け寄る裾をしつかとおさへ、郡兵衛「ム、面白い、兄弟なれば猶以て、厭でも厭でも抱いて寝る、よい橋渡が出来て

きた、結ぶの神の引合せ」と、しづく立つて庭に下り、郡兵「ヤイ十郎兵衛、今朝程も尋ぬる通り、何科有つて身が家來佐渡平は手にかけて。其上山口定九郎まで、殺したも儂が業、其譯ぬかせ、何とく」十郎「これは又しつこいお尋ね、主膳様を待伏して、殺さんとせし佐渡平兩人、ぶち放したは主君の爲」郡兵「ハチ結構な御主人に、忠義を盡す家來も主も盗人」十郎「イヤ申し郡兵衛様、拙者は主人に勘當受け、糧に盡きたる盗人術、我名は汚せど御主人には、何を以て盜賊呼はり」郡兵「チ、櫻井主膳は刀の盜賊、早先達て此家に押籠め、汝も大方同類ならん、白狀ひろけ」と刀の鐙、繩目に指込み、「サア何と」何と何との問狀に、かよりつながら高尾が思ひ、郡兵「サア苦しくば白狀せい。コレサ高尾、此責が目に見えぬか、サア儂も苦痛が助りたくば、尋ぬる事を早く撒出せ。コレ若俯いて計り居すとも、兄が態をよく見給へ、懣の返事と白狀を、聞かぬ内はいつ迄も、責道具の品をかへ、水責火責 鋌責、術なか早く返答せい」と、怨情を一筋の繩も喰ひ入る身の苦しみに、見るに堪へ兼ね聲を上げ、「お前も武士の身ぢやないか、情といふ字を書いてなら、少しは哀も知るぞかし、あんまり難面胴慾」と、泣きこがるれば、郡兵「無情とはそもの事、おれが心に随へば現在の小舅、責は扱置き科も見遁す、何と憎うは有るまいが」高尾「サイナ、夫程迄にわたしが事、思うて下さるお志無下にするではなけれ共、私

が身で儘ならぬ、もう此上は兄様次第、ハテどうなりと」と跡云ひさし、わき見する程猶ぞつと、郡兵衛、よいく、さういや此方も思案を替へ、得心づくで抱いて寝る、仕様は斯ぢや」と十郎兵衛が、縛しめほどき、郡兵衛コリヤ高尾、嘘か誠か知らねども、今の詞に取付いて、暫は緩める兄が成敗、嬉しいと思やるなら十郎兵衛に返事仕や。ヤイ十郎兵衛、現在其方は科人なれど、戀は曲者惚ぬいた高尾が兄、主膳が難儀を身に引受け、そちが替に成りたくば、高尾を口説て抱かして寝させ、此役目仕果せる迄汝體は汝に預ける、繩の解しを幸ひに逃隠れても逃しはせぬ、千里の野邊も獄屋の内、高尾も兄が助けたくば暮合限りに返事せい、兩人共に郡兵衛が暫の用捨は惚れたが因果、とつくりと思案して色よい返事を待つて居る。聞入れぬ其時は兄も妹も鬨り殺し、生死二つは一つの返事奥で待つぞ」と郡兵衛は色故にふる雨夜の空、見分兼たる胸の内、心残して入りにける。とつくと見すまし小聲になり、十郎申し高尾様、刀詮議の爲ぢやとて、現在お上の御息女様、御家來の郡兵衛に様付けなさるとのみならず、中間風情の妹と、怪我に申すも勿體ない、御赦されて下さりませ」高尾、ア、あの言やる事わいの、今日そなたの入込みを待つて居たも今の始末、そんな事氣にかけずと、兎角大事は刀の有無、どうぞして今宵の内に」十郎、サア、拙者も左様存するから、何卒少しの手懸をと思ふに幸ひ郡兵衛が、あなたに

惚れたがよい手懸、心得がたきは彼奴が大小、戀を叶へるお顔にて油斷の隙間に御覽なされ、
拵は違ふ共もし國次に極らば、中心は則亂れ焼、鉦は金にて庭草に飛交ふ蝶の彫物あり、實
正夫に極らば透を窺ひ手筈を遊はせ、私は其間奴部屋に身を隠し善悪二つを待つてをります」
高尾「ヲ、成程々々、肌は腫ねど郡兵衛に假の戀路も刀の役目、取返さば主膳も安堵、そなたに
知らす心の縁起、花は櫻木人は武士と、中に勝れし名に寄せて、知らす相圖も奥庭に、今を盛り
の櫻花、此水筋へ流すべし、其時必ず合點か」「ハア心得ました」と立上り、水筋清き我身をも、
暫しは隠れ陸奥の、忍びてこそは別れ行く。早約束の兼てより、戀ると君がよしあしの、返事
いかどと郡兵衛が、出づるも知らず此方には、たどとつ置いつの思案より、外は何にも夢現、
郡兵「ても味い後付、見れば見る程堪られぬ、返事はどうぢや」と云ふ聲に、思はず悔り立退く所、
「おつと通しは仕らぬ、最前いうた約束の、かねは聞いたが返事が聞かぬ、一人爰に居るからは十
郎兵衛が得心させ、大方抱かれて寐る氣ぢやある、エ、忝い。サアおぢや寐よう」と我一人、せり
立らると身のつらさ、何と答へん方もなき、色に心の一大事、探して見んと忝ひ寄る、高尾を膝
に抱き上げ、郡兵「斯した所は正眞の天女を抱いたも同じ事、どうもならぬ」と抱付いて、現に成つ
たる郡兵衛が刀をそつと、郡兵「コリヤ何する。エ、イヤサ刀を捉へて何とする」高尾「何ととは

郡兵衛様、わたしは事はふつよりと、思ひ切つて下さりませ、其代には今爰で尼法師と姿を變へ一生殿御に肌觸ぬがおまへの詞を立つる道理、夫でわたしは此刀」と、又取かよるを引き離し、郡兵衛「さうぬかしやふつより思ひ切る、其替り、十郎兵衛は云ふに及ばず、儂も共に目に物見せん。ヤア、土手助、此女を裏の樹木に猿繫、又此二腰は主膳が大小、詮義濟む迄汝に預くる。高尾を早く引立い」「畏つた」と荒氣なく、小腕取つて奥へ行く。かよる折節海藏院切戸間近く入來り、海藏院「彼のお頼みの一大事、殿を調伏の御祈禱も七日に満する今宵なれば、お頼み申した祈禱料唯今どうぞ」と、皆迄云はさず、郡兵衛ヤレ音高し人や聞く、何かの禮は跡より通運、折悪しければ先づ歸りやれ」「然らばお暇、必ずお禮を手取早う」チ、サ合點も眼で知らし、點頭き呻く衣の袖、人を助くる體もなく巧は百八煩惱の、數珠の數々繰り返し別れてこそは歸りける。奥庭は、咲亂れたる櫻花、詠めにあかぬ泉水の、水は澄ども濁り江の、高尾は無残や櫻木に締搦まれし縛り繩、今ぞ生死の境かと、涙の顔を振上げて、高尾「斯言ふ事とは露知らず、嘸十郎兵衛が待つて居やらう。どうぞ此事ついちよつと知らせん事も情なや、此身は櫻に搦られ刀の有家も得知らず、元より主膳の擒れを助る事も心に任せぬ、それも何故此繩目、エ、誰ぞ解いてくれぬかい。エ、どうぞ切れぬか解けぬか」と、身を揉あせる氣はそごろ、心も空に散々

と、残のこんの雪も身につもり、思おもひ重かさなる詫がことなき泣、高尾「エ、郡兵衛の人でなし、みすく刀を盗みながら、科さぶなき者を罪つみに沈め、其身ばかりが立つものか、物の報いはたつた今、思おもひ知らさで置かうか」と恨の涙はらくく、花は散々ちりちり泉水の、流れにふつと心付き、高尾「チ、さうぢや、相圖に流す櫻花、己おのれと獨り流るとは神佛のお力」と、悦び勇む折からに、花を相圖に十郎兵衛、首尾は如何にと前裁せんさいの、繁しげみをそつと差覗さしのぞき、見て胸むねくりの縛り繩、高尾「十郎兵衛か」十郎高尾様、この繩目は何故」と、解ほけどとけぬ涙聲なみだなき、高尾「何故とは郡兵衛が戀を叶へぬ見せしめと、縮しぢ搦なまれて身は叶はず、今まで泣ないて居たわいの」十郎「チ、御尤々々、譬へ如何様に思し召しても女儀のお手ではいかなく。此上は私がお前様を取持顔とりもちがほで欺だますに手なし、仕損しとんぜぬ私次第になされませ」と、伴ひ入らんとする後、「どつこいやらぬ」と奴の土手助、土手助「お旦那を欺さんとて、妹でもないやつを兄弟とは心得ぬ、此旨主人に申上ぐる、待つてをれよ」と駈け出すを、何の苦もなく引ひ攔つかみ、傍そばなる井戸へ眞逆まっさかさま様、「サア是で氣づかひ内證の、入譯いりわけ知らねばサアお出で」と、開ひらく障子の内には郡兵衛、郡兵「ヤイ十郎兵衛、縛り置いた其女誰が赦して汝解わらいた」十郎「いや深い様子は存じませぬ、私が解といたはあなたのお望のぞみ、此妹を上げませうと、思うてそれで解といたのでござります」郡兵「ム、すりや其方が得心させたか」十郎「成程々々、得心の上に

鬘斗付けて、只いつまでもお前様の女房、此十郎兵衛は兄ぢややら仲人やら、御用も有らば澤山にお遣ひなされて下さりませ」郡兵衛すりや身共が女房とな、夫は重覺、望み叶ひし上からは、高尾が兄の十郎兵衛、我が爲に言はゞ小舅、親しき一家となるからは、小舅殿へ頼みの印眞向碎げと欺し打ち、心得はつしと水手桶、十郎「コリヤお前何なされます、一家中は御心安う、斯様にお氣を張しやますと、我等いかう迷惑千萬、平に納めて置かれい」と、拂へば付込む郡兵衛が尖き手の内屈せぬ十郎兵衛、ひらりと交す身の捻り、猶も付入る間もなく、庭の飛石擔き上げ、受ける白刃の轉業稻妻、日早く高尾が取上げる「刀は正しく國次」と、云はせも果てず郡兵衛が、「夫見付けたら生けては置かぬ」と、又切る刀かい潜つて確乎と取り、十郎殿の重寶見出さう爲挿へられた十郎兵衛、高尾様と云ひ合せ兄弟と言うたも嘘、誠は先殿監物様の御胤」と、聞いて驚く計りなり。一間の内より櫻井主膳、主膳「土手助、刀」はつ」と答へて奥庭より、出る奴も詮議の種、主膳「連出かした十郎兵衛、一つの功の立たる上は、以前に替らぬ主從ぞ」と詞にはつと飛退り、悦び敬ふ計りなり。主膳「サア郡兵衛殿、最早遁れぬ貴殿のたくみ、包まずも明されよ」と、工みの裏道掘返され、叶はぬ所と性根を据ゑ、郡兵衛ム、扱は土手助めも、主膳が家來で有つたよな。顯はれし上からは隠すに及ばぬ、出頭其方を、科に取つて落さん

爲、いかにも國次の刀は盗み置いた、戻して仕まへば事は濟む。是より外云聞かす事はない、刀を持つて早歸れ」主膳「イ、ヤ刀の事より大それた貴殿の工、大祿を戴きながら、何恨あつて殿を調伏」野兵衛黙れ主膳、其方にこそ遺恨有れ、殿に恨は毛頭なし、さいふ汝が證據ばし」主膳「ホ、其證人は是に有り」と、海藏院に繩をかけ、引立出る伊左衛門、もう百年めと郡兵衛が切込む刀、身を交して、腕首搦み、主膳重々の極悪人、それ繩打て」と櫻井が、引擔いで頭顱倒、起上る間も十郎兵衛が、押へてかくる縛は、心地よくこそ見えにける。主膳「テ、出来したく」。盗み取られし國次の刀諸共、二人の囚人成敗は、殿のお差圖、伊左衛門儀は此度の御婚禮、お目出度の祝儀として、町人ながらも御扶持頂戴、それを規模に以前の如く、藤屋の家を取立つる、家の女房は絆屋お辻、夕霧は妾分、相續怠る事なかれ」と、詞にはつと勇立ち、昔に歸る伊左衛門、紙子姿も引かへて、古郷へ飭る錦の袂、變らぬ國の末繁昌、治まる道も戀の花、情の月は武藏野や、名にし高尾が傾城姿、今國人のお姫様、道中賑ふ竹本の、盡せぬ御代こそ目出度けれ。

傾城阿波の鳴門終